

道南遠征記

道南地方における山女魚釣りの解禁日は、毎年6月1日になっている。帯広は7月1日の解禁だから、一ヶ月も我慢しなければならないわけである。瀬音のメンバーとしては、黙って解禁日まで待つなんて出来るわけがない。そこで遊（有）休を使って、道南地方に遠征しようと思った。

土地勘のないメンバーの皆さんは、帯広市から道南と呼ばれる地方までどれくらいの距離があるのか、わからない事だと思う。行先は道南の名流といわれる相沼内川と、以前から決めていた。帯広を夜中の12時に出発して夕張、千歳、洞爺村を経由して八雲から雲石峠を下りたところ、そこが相沼内川が流れる、熊石町である。ざっと距離にして400km、時間にして7時間という無謀な計画で、今回の釣行はスタートした。

今回の釣りで一番心配していた事は、雪代の影響がどうかということと、解禁日から一週間という時間が経過しているわけだから、魚が残っているのかどうかという点だった。現地に到着して川の様子をみると、雪代なんてとんでもない。水量が少ないのである。果たして釣りになるのかな？といやな予感が、頭の中を駆け抜けていく。

気を取り直して、林道を上流に向かう。日本海沿いを走る国道から2km程進んだ位置に、「中の橋」という相沼内川本流にかかる橋がある。この橋の直下に二段式というのだろうか、堰堤が設置されている。幸いな事に、魚道も設置されているのだが、肝心の水量が不足していて魚道に水が通っていない干上がった魚道を尻目に、上流に向かう。下流から二番めの橋が泉流橋。流れも釣りになりそうな流れである。この場所に入溪することにした。仕掛けと竿の選択して最初は釣り下る。

期待に反して、魚の出は思った以上に悪い。深みのある瀬で、退屈しない程度にアタリがある程度。釣れてくる魚は、山女魚と岩魚が1:1の割合なのだが共に型が小さい。山女魚が平均15cm位で、岩魚はやや大きいかなと思える程度である。大きめの山女魚のみをキープして更に釣り下るが、チャラ瀬が多い場所が続いているので今度は釣り上がる事にする。

入溪地点より200m程上流に、本格的な砂防ダムが設置されている。こちらのダムにも魚道は設置されていて下流のそれとは違い、魚道の役目はきちんと果たしているみたいである。このダムの下流の深場で誘いをかけると水中でキラリと光るのが見えた。反射的に合わせをいれると、20cm程の三年子が釣れた。錆一つ無い綺麗な魚体に、思わず見とれてしまう。このサイズがなかなか釣れないということは、解禁直後に一通りの魚が釣れてしまった事を意味する。水量も少ないので、降水後に期待をするしか無いと思う。

砂防ダムまで釣り上がった時点で、第一ラウンドを終了とする。前もって買っておいた、コンビ二のオニギリを頬張る。食欲が満たされると、急激に強い疲れを伴った睡魔に襲われた。無理も無いと思う。30時間も、寝ていないのだから。無理をせず、しばしの昼寝となった。晴天のためか車の中の強烈な暑さで目が覚めたのは、正午を少しすぎたところだった。

今度は上流で大型の遡上アメマスでもと、上流の諸味橋（もろみ）から釣り上がる。この橋の上流150m程の場所に、北電相沼内水力発電所の放水口がある。この場所は上流で一番の大場所となっており、深い淵となっている。溪相も中下流と違って段さのある流れが多くなり、山女魚場から岩魚場といった感じを受ける。これで期待通り、魚が釣れてくれればいいことはないのだが、釣れてきたのは15cm位のかわいい岩魚。当然、リリースするが物足りなさを感じる。

新緑の木々のあいだに、苔のついた岩が水墨画のように絶妙に配置されていて、白く泡立つ落ち込みとそれに続く瀬と淵。釣り人ならば思わず竿を握る手に力が入るようなポイントで、思った通りの魚が出ない。自分の都合で魚が釣れるわけではないが、やはり溪流好きの僕から言わせると、美しい流れの中から、自分の期待したポイントより、魚が飛び出してくるのが見たい。失望が半分と、残りの半分で溪流の現状を見せ付けられた気がする。まだ宿に入るには時間が早すぎると、思い切って下流域に入ることにする。

中の橋近くに車を置き釣り上がる。瀬が多い流れだが下流ということもあって、深みも程々点在する。数

個めの深みを流していたとき、いきなり竿先を絞り込まれる。強引に引き上げると28cmの岩魚。いや、岩魚なのか、アメマスなのかが区別出来ない。魚体はアメマス特有の緑かった薄茶色だが、白い斑点が明らかに小さい。もともと同じ種類の魚だから、明確な違いがあるわけではない。まあ岩魚ということにしておこう。

遊びである釣りだ。自己満足が出来ればそれでいい。そろそろいい時間になった。宿に入ろうと、釣り場を離れる。ここで大きな問題に直面した。車の窓が、閉まらなくなってしまったのだ。PWのスイッチを押すと引っ掛かった様な鈍い音と共に、ガラスが動かないのだ。これは困った。窓が開かなくても、そう問題は出ないが、閉まらないのは問題である。仕方なく現地でドアの分解となった。

車載の工具を使って、ドアの内張りを剥がしにかかる。苦労を重ね、なんとか内張りを壊さないで外すことが出来た。メカの部分を覗いてみると、ワイヤーを誘導する樹脂製の部品が割れている為、ワイヤーが噛んでしまっていた。部品は交換しなければだめだと思うが、今やることは閉まらない窓を閉めることである。スイッチを操作しながら、引っ掛かっている部品を、力づくでずらす。一時間もかかっただろうか、何とか窓を閉めるのに成功した。ただし、両手はグリスでベトベトになってしまったが....。

今日の宿は熊石町の平田内荘。昨年の解禁日に泊まって気に入ったので、今年も宿はここに決めた。部屋の窓からは日本海が見えるが、平田内荘は平田内川沿いを1・5km程、山に入ったところにある。夏になれば烏賊漁の船のいざり火が見える筈だが、まだ漁期ではないのだろう。夜の日本海は、闇の中で何も見えない。国民宿舎の平田内荘は、希望により、いろいろな料理を頼めるようなシステムになっている。道東に住む僕は、美味しいウニはなかなか食べることが出来ない（大金払えば別だが..）ので、ウニ刺を頼むことにする。600円だから量は生きているウニ一個分だが、このくらいが身分相応だろう。標準の料理もお世辞めきに、美味しいと思う。それとも疲れた体だから、美味しく感じただけだろうか。

8時ころに、食事を下げに宿の人がドアをノックする。不覚なり、食事を終わって寝てしまったのか。早朝、5時に目が覚めた。いくら疲れているといっても、普段は会社にいる時間に寝たのだから当然かもしれない。眠気覚ましに温泉へいく。ここの温泉は弱食塩泉とのことだが、舐めてみても塩気はしない。弱だから当然かもしれないが..。さて今日はどこの川にいかしらと、まだ疲れが残っている体で温泉に入りながら思っている自分は、やはり釣り馬鹿なのかもしれない。（平田内荘にて）

朝食を食べて札幌に向かう帰路の途中で、利別川の支流の下ハカイマップ川へ寄る。何故か、上流からの車が多い。狭い林道なので、すれ違うのも大変な目に遭う。昨日の相沼内川と違って、こちらは雪代が完全に出ていなく、薄い笹濁りで水量もかなり多い。気温も低く10度前後。水温はかなり低い。

林道が川を渡る一つめの橋から釣り下る事にする。300m程釣り下ったが、アタリは一つもなく解禁後の釣りラッシュと、時期が早いと結論付けた。車に戻り一服していると、函館ナンバーの車が止まった。一人のご老体の方だったが、聞くと山菜狩に来たらしい。林道の上の方で営林署が山菜園と称して、山を整備して一人500円の入山料をとってタケノコ（笹竹）を取らせているらしい。悪いことに今日が開園日初日だったらしいのだが、今年の大雪の影響で成長が遅くあきらめて帰っていく人が多いと聞いた。それで山から下りてくる車が多い訳だ。釣りに来たことを告げると、解禁日からひっきりなしに人が入っているという。上流は熊はどうなんですか？と僕が聞くと、最近の熊は人なれして人間を恐れとていないと老人はいう。なんでも、林道の真ん中に座り込んで、車で行こうがクラクションを鳴らそうが、全然動こうともしないらしい。恐い話だと僕は思う。また、下流にある砂防ダムが、うまく機能していない意味の事も言っていた。魚道の無いダムの影響が、この川でも起きていた。せっかくの魚道なのに生かされていない。悲しい気持ちになりながら、川を後にした。途中の長万部にて、昼食をとる。ここの名物は、カニめしである。駅弁の名物として有名だが、僕も好きな弁当の一つなので買うことにした。一個1000円也。店に入った瞬間に高い！と思ったが仕方が無い。一つ買い込んで、国道のパーキングエリアで昼食とする。

ふと思ったのだが長万部のカニは、今年は解禁になったのか？と思った。カニの出店が国道沿いに並ぶ長万部だが、以前はカニが少なくなって、道北のオホーツク海側からのカニに頼っていた時期があった。カニも山女魚も、少なくなった事には変わりがないらしい。話は戻るが、作りたてのカニめしは美味しい。適度に味付けされたカニの身と、ご飯がよく合う。少々高い昼食だったがよしとすることにする。

夕方まで札幌の実家に着きたいので、長万部を後にする。帰り道沿いには、朱太川や貫気別川などがあるが、今日は釣り人でいっぱいだと思う。そこで、北海道のオショロコマの南限とされる真狩川へ向かう事にする。以前、この川の源流域に河川工事が入ったと聞いているので、その様子も見てみたい。

豊浦から真狩村に向かう途中の景色は、のどかな春の風景だ。もちろん帯広でも今は春なのだが、丸く低い山が多いのと広葉樹が多く新緑の色にあふれている。真狩村に入って、真狩川の源流部を目指す。源流と聞けば険しい谷を思い浮かべるが真狩川の源流は、なだらかな丘というかほとんど平野と言っている場所にある。オショロコマは冷水性の魚なのにとされるかもしれないが、この付近は蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山（ようてい）の伏流水が湧き出ている為、平地でも一定の水温が保たれている。事実、真狩川も源泉は農家の近くの池が源流となっており、池に水が湧き出ているスプリングクリークである。

道路が源流に近づいて川の様子をうかがうと、10年前の川とは似ても似つかぬ川となっていた。自然工法と称する新しい河川工事の方法と聞いていたが、実のところ三面護岸のコンクリートが岩になっただけの事らしい。ある程度、曲線的に流れるように工事はされたみたいだが、溝が単に曲がっているだけのことだった。石を段々にして溪流の落ちこみらしい格好をした場所もあるが、素人の釣り人が見ても自然の川とは決していけない代物であった。

気を取り直し、所々に昔の面影が残っている部分を釣ってみる。結論から言うと、オショロコマは釣れなかった。放流物と思われる小さな山女魚が、遊んでくれただけだった。オショロコマは、いなくなってしまったのだろうか。それでも、上流から釣り下って来た釣り人の話を聞くと、上流で20cmくらいのオショロコマが数匹、泳いでいたと教えてくれた。彼のねらいは放流物の山女魚で、釣れたオショロコマは全て放流しているという。何とかオショロコマは生息していたと確認出来たのでほっとするが、絶滅寸前の魚であることには間違いはないだろう。

かつては、クレソンが密生していてその間から、オショロコマが餌をめがけて走ってくる流れはもう過去のものらしい。近くでは家族サービスの一行が、河原にシートを広げて食事をしている風景も目に入ってくる。よくみると、家族でも釣りを楽しんでいるらしい。以前は道路沿いを流下しているとはいえ、イタドリに水面が覆われた流れだった。今回の河川工事の一環だろうか？河原のイタドリや笹なども、綺麗に切り取られている。

よく国は、治水のために工事が必要と国民に説明する。しかし、今回訪れた真狩川の源流域は、川幅も広いところで3mあるかないかの流れだ。しかも、洪水なんて絶対に起きない、湧き水の川である。なぜこうも簡単に川をいじる必要があるのか、理解に苦しむ。いずれにしても真狩川は、既に釣りをする事が出来なくなっているのがはっきりした。すれ違った釣り人の言葉通りにオショロコマが生息していても、少ない数と予想がつく。近い将来、オショロコマの南限といわれる場所が変わってしまうのではないかと、危機感を覚えながら札幌への帰路につく。

途中で羊蹄山の姿が、幾度となく目に入ってくる。ある場所からみると、本当に富士山そっくりに見える。五合目以上はまだまだ残雪があり、今年の雪の多さを改めて感じる。数年ぶりにみる蝦夷富士は本当に雄大だった。川さえ良ければ、住むには良いところなんだがなと思うのは、釣り好きの僕だけであろうか。

（真狩村にて）

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。(1996.6.9 #6784 ~ #6788)

夏間近の北海道

7月1日の解禁後も、道東地方は気温の低い状態が続いていた。北海道には梅雨がないことになっている筈なのに、毎日が厚い雲に覆われている。雨も多いため十勝の河川は水量が多く、気温が低いために水温も上がらない状態だった。7月の解禁明けといえ、透き通るような青空が広がる絵はがきのような光景が普通で、この青空を今年は台風が運んできてくれた。例年よりも10日も遅い。

せっかくの夏休みなのに、この夏晴れの天気、釣りに行かないわけにはいかない。ただ雨による増水も不安の種で本流域の釣りは多分、不可能だと判断した。少し遠くなるが、猿留川の支流なら水も収まっているだろうとえりも町目黒を目指す。

途中の札内、歴舟、豊似などの南十勝の溪流は案の定、大增水で解禁日に釣行した楽古に至っては濁りまで出ている。猿留は大丈夫だろうかと不安になるが、快晴の空を見ていると心が自然と弾んでいくのがわかる。広尾町を抜け、黄金道路に入ると台風の影響か波が高く、所々道路に波がかぶっている。海岸をみると、波打ち際で昆布を拾っている漁師を見かける。この波が高い時と思うが、シケの後は昆布が波打ち際に打ち寄せられるので、格好の日なのかもしれない。

そんな光景を見ながら、目黒に到着する。途中の林道から猿留川の本流を望むが、やはり水量は多い。だが濁りは、全く出ていない。支流は大丈夫と判断し、支流に通じる林道を進む。しばらくは川と離れているので支流の様子は判らないが、林道の様子からみてそれほど大雨ではなかったらしい。支流の沢が道路から見えてきて水量をみると、増水気味だが十分釣りになる水量である。

さて何処から入ろうかと思案に苦しむが、とりあえず下流にも上流にも機転のきく廃道跡へいってみることにする。林道から道を折れ車を止める。やはり水量が多い。林道から眺めてみると、実際に川に立ってみるのでは大違いである。

濁りは全くない状態なので、この場所から入渓することにする。あまり期待をしないでとりあえず魚の付きをみるために上流へ向かう。水量が多いためポイントはたくさんあるのだが、自分はじっくりと釣るタイプではない。大場所だけを、ポイントと決め竿を出す。予想に反して魚の出は良い。一投目でアタリがでた。あわせを入れると20cm位の岩魚が釣れた。少し頭の中に不安がよぎる。時期的に山女魚場所の筈なのに、岩魚場になっている。不安は的中して岩魚しか釣れない。但し、魚影の濃さは抜群でここぞと思ったポイントからは必ずアタリがでる。型は18~25cmと大型ではないが、退屈することはない。

この状況だと釣り上っても、岩魚しか釣れないのは目に見えている。一転して釣り下ることにするが、相変わらず岩魚ばかりで、餌の残りが不安になってきた。岩魚は全てリリースしているのだが、釣れてしまえば餌はそれでおしまいである。

仕方なく、小型の岩魚が掛からないように針を10号に換えてみる。更に釣り下って大場所のみ竿を出す。相変わらず岩魚に餌を与えている。既に30匹は釣っただろうか？岩魚釣りなら釣る気になれば100匹は軽く釣れると思う程、魚影は濃い状態が続く。

1km程、釣り下ると溪相が穏やかになっている。水面も日光があたって明るく、川底の小砂利の典型的な北海道の山女魚場所の様相だ。さすがに日光があたっている場所では、岩魚は殆ど出ない。しかし、肝心の山女魚も全然出ない。

半分なげやりな気持ちで釣りくだっていくと、深く長い瀬があった。上流の岩の上から餌を流し打ち返そうと思ったときに、水中で白い魚体が光った。山女魚か？これまでのなげやりな気持ちも一瞬のうちに消え失せた。針先を確認する問題ない。餌を付け替え緊張して竿を振り込む。落ち込みから瀬に移るころ誘いをいれる。糸がふけ目印が止まった。アワセを入れると太い魚体が瀬から飛び出してきた。水面を切った状態で明らかに岩魚と色が違うのがわかる。白銀色の夏の山女魚だ。タモを忘れた為、竿を持ち換え、右手で掴んで取り込んだ。大きさは8寸を少し切るくらいだが、体高の高さは成熟した山女魚の証拠。パーマークも

薄く、白っぽい魚体の山女魚。正真正銘の幅広山女魚だ。この姿が見たくて、長い冬を耐え我慢してきたかいがあったとつくづく感じる。この一匹で本心から満足する。

この山女魚は想像するに、この沢の登りの走りだと思う。この一匹が釣れた後、更に釣り下ったが、山女魚のアタリはなく岩魚が数匹釣れただけだった。丁度、去年の解禁日に、この沢に入った時と同じ様な感じである。

例年よりも10日は遅れているとすれば、20日の連休前後がこの沢の最盛期だろう。農作物も10～15日程、生育が遅れていると聞いたことがある。自然の中に住む山女魚も、丁度おなじくらの遅れなのだろうと変に感心する。

天然の山女魚が生息する、北海道の溪流。しかし、天然だからこそ、時期によって釣れたり釣れなかったりする。水温や天候によって生息域を自在に変える彼らに出会うためには、釣技だけではないプラスαが必要なのかもしれない。

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。(1996.7.12 #7539)

秋の訪れ

台風が去った後も、雨天が続いている北海道十勝地方。気温も上がらず、日中も20度をようやく越える毎日が続いている。ようやく日曜日になり、目が覚めると大粒の雨が降っている。釣りに行こうか迷う状況だが、昼頃になって空が明るくなってきた。ようやく腰を上げ、家を出発したのが11時と遅い出発となった。

車を走らせていくと、雲の切れ間から青空が覗いてきた。日高の山に視線を向けると、曇りながらも山の稜線が見えている。今年の釣りでは初めての事だ。途中、数本の川の様子をうかがうと、雪代を思い浮かべるほど水量が多く、濁りも出ている。本流域はあきらめ、釣りになりそうな支流を探す。一時間ほど川をみてまわり、ようやく釣りになりそうな川を見つける。

天気もすっかりと青空が広がり、セミも鳴いている。例年だとセミの声など珍しくもないのだが、今年に限って言えば初めてその声を聞いた気がする。平水とは違う、水の力強さに耐えながら釣りを始める。水量が多いため、普段ではポイントにならないような場所も、絶好のねらい場に変わっている。

深場を中心に釣り下ると、8寸ほどの岩魚が退屈しない程度に遊んでくれる。山女魚は新子が多く、岸辺の浅瀬で盛んに泳ぎ回っている感じである。空が突然暗くなってきたと思うと突然、大粒の雨が降ってきた。淵などでは水面が波立つ位の量であるが、かえって魚の出が良くなるかもしれない。

雨に濡れながら更に釣り下ると、緩い瀬で底が砂場で大きな岩が点在している溪相になってきた。餌を付け流心の外れを流すと、餌をめがけて魚が走ってくるのが見える。糸を一瞬送り込み、あわせると中型の岩魚が釣れた。同じ様な場所では、魚が走ってくる姿が必ず見える。それも山女魚の様なすばやさで。水量が多いのと雨で魚の警戒心が少なくなっているからなのだろうか。とにかく餌に食いつく瞬間がみえるのは、エキサイティングな光景ではある。テンカラ釣りの人気があるのもうなづけると思う。

そうした岩魚とのやりとりをしていると、なま暖かい風が吹いてきた。山からの風だが、天気も急速に回復し青空が広がる。流れが急にまぶしくなり、ベストから偏向グラスをとりだす。更に釣り下ると、淵の流れ込みで山女魚のアタリがあった。釣り上げると8寸ほどの大きさだが、既に婚姻色が出始めている。魚を取り込んだ瞬間に白子が飛び出してきた。8月中旬で既に産卵準備が終わっているのか。7月の解禁から一ヶ月半・・・既に釣期は終わりに近づいている。例年にない、早い秋の訪れを感じずにはいられない。

今月の終わりからは二週間の出張もあり、もしかしたら今シーズン最後の釣りになるかもしれないと感じる。そんな事を考えていると、夕暮れが近づいてきた。既に秋の気配を感じるということは、早めに釣り終わらなくてはいけない。暗くなってからの山中は罾の危険もある。十二分に楽しめた釣りだったのですぐさま納竿した。

帰り道の林道で、エゾシカを一頭見かけた。立派な角を持った、雄鹿だった。車との距離は50mほどだろうか。鹿は僕の車に気づいてこちらをじっと見ている。林道の脇に車を停め様子をうかがうと、やがて彼は車を気にするのではなく自分の毛を手入れしはじめた。左右にゆっくり首を振りながらの様子は、ユーモラスなものだった。やがて林道を下ってきた釣り人と思える車に鹿は気が付き林の中に姿を消した。それをみて複雑な気持ちになった僕は、帰路についた・・・。

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。

(1996.8.18 #8889)

レインボウトラウト

夏らしい青空が殆ど望めなかった北海道、十勝地方。僕にとっては8月までが山女魚釣りのシーズンであり、今年の天候を恨めしく思っていた。9月に入ると何故か天気の良い日が続いて、休日になると心がそわそわしてくる。8月に婚姻色の出ていた今年の山女魚は、産卵も例年より早くなると思い、今年はこれで溪流ともお別れかなと思っていた。しかし、今年の溪流釣りは極めて不本意な成績であり、山女魚以外に釣れる魚を狙ってやろうと思った。

帯広市内で十勝川と合流する川の一つに、札内川である。水質日本一に何回か輝いた、水の綺麗な川である。あまり釣りの情報も聞かない川であるが、型の良いニジマスが釣れると聞いた事がある。山女魚釣りが出来ないならニジマスでも狙ってみようかと、会社の同僚に電話をかけ、午後からという遅い出発で札内川に向かう。釣り場は帯広の大正町というところに、何となく決定する。

大正町と言っても場所など判らないと思うが、JRが国鉄時代に愛の国（愛国駅）から幸福へなどと一世を風靡した場所のすぐ下流にあたる。大正町の近くで、札内川を渡る橋がある。橋から堤防下に道が続いており、下流にも上流にも車で乗り入れられるようになっており、入渓には極めて便利な場所である。案の定、橋のすぐ下流で盛んにフライを振っている釣り人がいた。溪師は、他の釣り人は見たくないものだ。下流に言ってみようと、同僚の話をする。

道を進んでいくと、イタドリや灌木がところどころ道を塞いでおり、車を大事にする方にはとてもお勧め出来ない道が続いている。5分程、走っただろうか。川に向かう小径が数本あり、適当な場所で川に向かう。途中、子どもの頭ほどある石がごろごろと転がっており、川が氾濫した時は堤防近くまで水が流れている事をしめしている。車を駐車し、川の方角をみると異様に広い河原の向こうに、札内川が流れているのが見える。

十勝平野の真ん中を流下している川であり、落差は殆ど認められず広い河原とともに溪流というイメージよりも清流と言おうか、本州の鮎の釣り場といった感じだろうか。川の流れは、まさに縦横無尽に方向を変えている。一見変哲もない流れに見える場所も、近づいて川を観察すると川の中に川が流れているとも言おうか、流れを読む眼力が必要になる釣り場だと思う。ニジマスを専門に狙った釣りは十年以上無い為、山女魚や岩魚とポイントがどう違うのか？果たしてニジマスはいるのだろうか？期待と不安を抱いて川に向かった。

一通りポイントを狙ってみるが、思いのほか水流が速くポイントは意外にと少ない事に気づく。比較的穏やかだと思われる瀬も、溪流の早瀬くらいの速さと感じる。浅い流れを横切るだけでも水を重く感じる。ポイントは淵かと思いつつも、深みはあれど淵は極めて少ない。同僚と二手に分かれてポイントになりそうな淵を探し、ようやく釣り場を見つける。しかし水が重く一見、浅く見える徒渉も困難で危険を伴う。川の流れを目で追いながらルートを開拓する。

大げさと思われるかも知れないが、川幅広い札内川の本流は本流釣りが一般ではない北海道の溪流釣り師には、川歩きや徒渉技術を要する川だと思う（僕だけかもしれないが・・・）ようやくポイントを探しても、一般の山女魚釣り場と違ってポイントが遠く通常、山女魚釣りで使用する竿では短すぎてポイントに餌が届かない。必然的に水中に立ち込む事になるが玉砂利の川底は流れによって足をすくわれそうになり、極めて不安定な釣りとなる。

同僚は上流のポイントで、盛んに竿を振っている。下流にいる僕も短い竿を精いっぱい延ばし、何回も何回も餌を流す。釣り場が不安定な為、ポイントの上流に立ち、やや下流に振り込む格好になるわけだが、この状態だとどうしても餌が浮き気味になり、しかも糸にテンションがかかって釣りづらい。オモリの大きさを調節したりして、何十回か流しただろうか。目印は水中に沈めているのだが、竿先に「クン」という感じのアタリがあった。アワセを入れるが、餌を半分食いちぎられた仕掛けが上がってきたのみだった。その後、何回も餌を流すが、やはり野生のニジマスは釣り堀とは違って二度とは遊んでくれなかった。この日は

あきらめて納竿し、同僚も僕の姿をみて戻ってきた。聞くと一度、アタリがあったがばらしてしまったという。初めての川で釣れるという僕のジnkスも札内川には通じなかった。

//// 翌日、目が覚めると昼を回ろうとしていた。不本意の成績に終わった札内川

//// にあたるようにC Bやインターネットを早朝まで楽しんでいたので (^^.:

アタリがあっても釣れなかったということは、釣師にとって屈辱の他ならない。昨日の経験を元に、仕掛けを改良する事にする。5.3mの竿に通しの糸を竿尻までの長さを確保する。針は水中の抵抗を考え1ランクサイズを落とし、7号の針とする。針から30cm上に昨日よりもオモリを重くする為、ガン玉をやめて板オモリを8cm位の長さに切り丹念に巻き付け、ニツパを使い糸に固定する。昨日と同じポイントに向かう途中、何も食べていない自分に気が付き、途中のコンビニで少しの食料を買い込む。釣り場に到着後、川を眺めながら遅い朝食兼昼食をとる。野外での食事は、何を食べても美味しい。

川に一艇のカヌーが下ってきた。何処から来たのだろうか？三人程乗っていたが、三人で盛んにオールを漕いでいる。釣り師の少ないこの時期の札内川は彼らの楽しいフィールドなのだろう。カヌーが通ってから少しの時間、車の中で川を静める。昨日の惨敗が記憶に残っているため、少しでもポイントを休めておきたいと思ったからだ。

十分程たってから昨日のポイントに向かった。竿を延ばし仕掛けを取り付ける。餌を付け昨日と同じ流れに餌を振り込む。オモリを変えたのが幸いしたのだろう。ポイント深くに餌が沈み、良い感じで流れている。途中、糸を送り込み誘いをかけると、竿を押さえ込まれた感じの魚信があった。アタリを入れると強い引き。足場が悪いのは昨日と同じなのでやや強引に引き抜く。

9寸程のニジマスが水面から飛び出してきた。白っぽい魚体に特有の黒点を散りばめた綺麗なニジマスだ。ヒレもまっすぐ伸びており、札内川で育った事を物語っている。型は小さいが引きは抜群で下流に走られた時は竿を伸されそうになる。やはり、そのファイトは多くのアングラーを魅了する魚と思う。ニジマスというよりレインボウと呼びたい魚だ。

昨日、同僚が盛んに粘っていたポイントに向かう。近くで見ると僕が粘ったポイントよりも広い淵になっており、長い竿が欲しくなるポイントだった。まずは手前から餌を流し込む。すぐにアタリがあり、今度は尺オーバーのレインボウ。段々と遠くに餌を運んで、同型のレインボウをもう一匹釣り上げる。広い静かな淵と奥に見える落ち込み。魚がかかって淵を走ると、青い魚体が光って見える。

一番良いと思われる奥の落ち込みへ、精いっぱい水中に立ち込んで竿を振り込む。少しの流れに乗せたその時、このポイントで三回目のアタリがあった。アワセを入れるが十秒程、水中を走られて針を外されてしまった。同型のレインボウだと思うが何故か「まあ、いいか」と思う自分に驚く。昨日の惨敗から今日の会心の釣り。少しの時間だったが今日の釣りは良い釣りをしたと自分でも思う。

狙ったポイントから魚が釣れた事が、僕を満足させたのだろうか。一時間も釣りを続けたかどうかの雪辱戦だったが、この三匹のレインボウで十分満足し帰宅した。釣り場から家まで20分、こんな近くの川で素晴らしい釣りが出来るのは、北海道ならではだろう。また、遊びにきたいと思える川の一つだ。

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。

(1996.9.15 #9822)

鮭の登る川

10月1日、帯広から太平洋に向かって南下して、一本の川を訪れた。目的は溪流釣りだ・・。この時期の溪流釣りは久しぶりで、本来は竿を出さないことにしている。禁を破ってまで魚を手に入れたい理由があったからだが、山女魚は多分、産卵期を過ぎて釣れるのは新子か錆びたものだろう。岩魚、それもアメマスならまだ銀ぴかのものが釣れるかも知れない。上手くいけばニジも釣れるかもしれないと思った。

林道を上っていくと、本流に下りられる小径があった。車をとめて川の様子をうかがう。河原からなにか腐乱したような臭いが漂っている。さてはと思い川に下りていくと、おびたしい鮭が群をなしていた。先ほどの臭いは、産卵を終えてホッチャレとなった鮭の腐敗臭というわけだ。無論、嗅いでいて気持ちの良いものではない。でも、考えてみると、北海道の川でこの時期は本来であれば、何処の川でも同じ臭いがするのが本当だと思う。

河口で捕獲され河川に遡上する事なく、一生を終える鮭の方が多いというのは、なにか不自然な事と感じてしまう。いずれにしても浅瀬には鮭がうごめいている流域では、釣りは不可能であるしモラルにも反する。そう思い上流に向かう事にした。

車をとめた少し上流には、サケマスの孵化場があり鮭の遡上は、そこまでかなと思ったからだ。思い切って、最上流域に入渓する事にする。上流には大きな堰堤のある川なのだが、堰堤より上流は熊が恐ろしく取りあえずは堰堤下を狙ってみた。深い深みもある一見、良さそうなポイントなどだが、魚のアタリは無く落胆する。それと水質もあまり良くない感じがする。堰堤の付近に共通する何ともいえない雰囲気ではある。粘っていても釣れる見込みは無いと判断して、下流に戻り本流にかかる橋付近に入渓する。ところが深みやトロ場にはいないと思った、鮭が群雄している。ポイントに近づくと、岸よりの浅瀬にいる鮭が驚いて水しぶきをあげながら逃げていく。例年、この時期に上流域まで鮭が遡上するのが本当なのか？それとも最近の鮭の豊漁を踏まえ、河川で産卵させるようにしているのか？

孵化場の上流には普通は鮭は遡上する事は少ないのだが、ウライを越えてきたとは思えない程の数がいる。水しぶきをあげる鮭の合間で竿を振るが、新子がときどき遊んでくれる程度だ。鮭の産卵期にはイクラが抜群の効果をあげることは僕にもわかっているが、新子しか釣れない釣り場は餌が無駄になってしまう。仕方なく、支流域に場所を移動する。

流石に、支流域で川幅が細くなるところでは鮭の姿は見えない。ただ、遊んでくれるのは相変わらず新子が多く、イクラを使うのはやめて大きなブドウ虫に餌を変更する。大きな餌は新子には大きすぎるので、釣れても途中で落ちてしまうという寸法である。この作戦が良かったのか、深みでは錆びていない岩魚が釣れるようになった。岩魚というよりも、アメマスといった方が良いほど斑点が大きな岩魚だ。型は大きい物で25cmというところか。丁度、食べ頃の大きさではある。

実は今回は、転勤で送別会を兼ねたキャンプが予定されている。キャンプで魚の燻製を作ろうという事になったのだが、肝心の魚が少ない。この為の釣りでもあり、予定数の10匹をキープした。竿を仕舞い釣れた魚の腹を出していると、目の前の浅瀬に背鰭が見えた。鮭が上っているのだ。手を休め様子をうかがうと、全身を使って懸命に上流へ上ろうとしている。既に幾多の難関を乗り越えてきたのだろうか。体は傷つき、所々白くなっている。鮭の遡上は何回もみている僕でも、その痛々しい体を使って川を上っていく姿は、感傷的な気持ちになるものだ。

釣りの帰りに、途中の林道で車をとめ支流にかかる橋から、川を眺めた。沢山の鮭が小砂利の川底で、産卵床を掘っている様子がうかがえる。なんともなく鮭の姿を眺め、数枚の写真を撮影し林道を下る。

途中の牧場で、シカの群を見かけた。溪流釣りで出会う動物の中で一番多いシカではあるが、牧場の中に群をなしているのは初めての経験だった。頭数は8頭程いるだろうか。秋の夕暮れは早く薄暗くなってきた牧場に、餌を探しに山から出てきたのだろう。盛んになにかを食べている。距離は100m程はなれていた

のだが、車に気が付いた様子で一斉に首をあげている。数頭は立派な角を持った雄シカで、逆光で角が影絵の様にみえる。やがて音を立てながら走り去るシカを見守りながら、車のエンジンをかけ林道を下る。途中で先ほどのシカが逆の方向に林道を横切っていった。ゆっくりと走っていたので大丈夫ではあったが、危険な行動をするものだ。

帰り道、海岸線の道路を走っていると、昼間と違ってうねりが大きくなっていた。台風の影響なのだろうか。一度、波飛沫で目の前が真っ白になる程に波が高い場所もあった。波を見ていると今年、今年の溪流釣りも波瀾万丈の釣りだったような気がするなど、不吉な事も思ってしまう。さて、来年はどんな釣りが出来るのかな？と来シーズンを想像しながら今年最後になるであろう溪流釣りを終えた。

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。
(1996.10.1 #10185)

禁漁前釣行

5月からの二ヶ月間、山女魚釣りの禁漁となる十勝の河川。禁漁後でも岩魚などの魚は釣っても良いとは判っていても、心に引っかかる何かがあった。その為、僕の釣り初めは道南が解禁になる6月というのが通例だった。しかしながら、今年の十勝の春は早い。4月だというのに、気温は20度を越える日もあり、畑も作物の緑が例年よりも早く感じる。

市内を流れる札内川の水量も、雪代が落ちついたのか平水に戻りつつある。連休はじめの土曜日、目が覚めると青空が広がっていた。昨日の晩、連日の疲れがピークに達したのか、BARで少しの酒を飲んだだけで急激な眠気を覚え、帰宅してからの事は何も覚えていない。

昼くらいまで家で過ごしていたのだが、気温があがっているのかTシャツ一枚でも寒さを感じない。何かが弾けたように一路南を目指して、気がつくと思の通り釣具屋で餌をもとめている自分に、思わず笑ってしまう。

十勝の河川は、どこも昨年と同じように、清らかな水が流れていた。水量も、平水よりやや多いといった感じだ。水量が落ちついているとしても、時期が時期だけに本流域は難しいと判断する。昨年の釣りを思いだし、深場があり水流が比較的緩やかな川へ向かう事にした。釣り具屋でもかなりの情報を教えてくれたが、溪流の情報は当てにならない・・・。

林道を走っていると夏場の藪が嘘のようで、道から川の全てが見える感じだ。水量はやはり間近でみると夏場のそれとは違って、やや多いといった感じだろうか。水温を計ると8度とでた。時期的には良い感じと勝手に決めつけ、路肩に車を止め、竿と餌だけを持って林道から見えたポイントに餌を振り込む。間近に川を見ると水量が多いせいか流れが夏場よりも速く感じる。スニーカーのままなので川に立ち込むわけにもいかず、河原を歩きつつ上流に見える落ち込みへ移動する。

そこは川幅全体が段差になっているようなポイントで、手前と奥に落ち込みがあり、川の中央で緩やかに重なっている感じの場所だった。セオリー通り手前から餌をいれ、数回流すも魚信はない。奥の落ち込みを狙ってみるが、竿が短く苦労しつつも何とか餌を流すと、今まで狙っていた手前の落ち込みから魚が飛び出したようにみえた。次の瞬間、目印の下にある餌のあたりで魚が身をひるがえしたのか、銀色に光る姿がみえた。竿を送り込みアワセを入れると、竿先が引き込まれる。無理な体勢で仕掛けを流していたので、竿が寝ているのが辛い。

川に入るわけにもいかず、無理矢理糸の太さを信じて強引に抜きあげた瞬間、魚が水面から飛び出した。同時に針の結び目から糸が切れたのだが、幸運な事に魚は河原に落ち魚体をくねらせていた。竿を離し魚を必死でつかみ、今年の第一号をものにす。魚は岩魚だった。大きさは尺を少し越えた程度か。夏の瀬で釣れる山女魚の釣り味が一番と信じる自分だが、このクラスの岩魚になると流石に素晴らしいパワーを持っていた。岩魚の口には針が残っており、幸運にも釣り上げられた事を溪に感謝するも、糸付きの魚を出さずに済んだ事にほっとしたと言う方が正しいかもしれない。一匹が釣れると、本当に気が楽になるものだと思う。ウェーダーとベストを取りに車に向かい、身支度を整えて釣り上がる。

気楽な気持ちでポイントを探り、半年ぶりの溪流釣りを楽しむ。溪を歩き、魚と遊び河原に顔を出している露の臺を眺め、山の残雪をみて過ごした。釣果は岩魚が2匹、越年山女魚が4匹（速やかにリリース）だったが、釣果以上に自然の中で過ごしたことが、一番の収穫だ。

帰路、林道で車の目の前を若いエゾシカが横切っていた。衝突事故は起こしたくないが、身近で野生動物に出会えるというのも都会では味わえない一コマではある。野生動物でも罠には逢いたくないけれど。

※この釣行記は Nifty Serve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップしたものを転載しました

十勝の岩魚釣り

天気予報で週末は天気が回復しそうだと言っていた矢先、I君から釣りの誘いがあった。誘いというよりも自分では、場所も釣り方も判らないのが半々だろう。溪流釣りを人に勧めた事はないのだけど、夏になると休日毎に釣りへ行行った話をしているし、写真を見せていたりしていた仲なので、自然と溪流釣りに興味を持ったのかもしれない。

朝6時に僕の家に来るように申し渡したところ、5分前に彼の車が来た。「うんうん」時間厳守で感心する。荷物を僕の車に積み、最初は札内川支流の戸蔦別川（とったべつがわ）上流を目指した。実のところ、この川には一度も釣行したことは無いのだが水量が豊富な上、流程が長い川なので上流域は岩魚が釣れるだろうと考えていた。

拓成橋を渡り林道を登って行くとすぐ右手に砂防ダムが見える。魚道は無く、上流で禁漁の山女魚も釣れる心配もない。川を右手に見ながら上流へ登っていくと、多くの砂防ダムが設置されているのが見える。ダムとダムの間では釣果は望めないと思いつつ、上流へ上流へと車を走らせる。10km程、走った頃だろうか。これまでで一番大きな砂防が姿を現した。砂防というよりも、本格的なダムと言っても良いほどの大きさだ。林道も、これより先は立ち入り禁止でゲートが閉じられている。

本来ならこれから先は徒歩で歩き、源流を目指すのが正当派の岩魚釣りだと思う。でも、初心者と同行している事を考えると、その流域はいたずらに入溪する場所ではない。仕方なく途中の林道に車を止め、取りあえず竿を出してみる事にした。

実際に川に近づくと、6月とはいえ水量も多く、初心者を連れて遡行出来る川ではない。荒瀬と淵が交互に現れる溪相良い川で、日高山脈からの豊富な雪解け水が、川幅一杯に流下している男性的な川だ。林道から降りた場所は、岩場となっており岸から竿を振ることが出来る。駄目でもともとと、仕掛けを作り、淀みを中心に餌を流す。

予想に反して三投目にアタリがあり、間をおいて合わすと心地よいパイプレーションが竿を通じて伝わってくる。魚が水面から飛び出すと、黒っぽい魚体が見えた。その魚を引き寄せて僕は少し驚いた。手に引き寄せられた魚は、赤い斑点をもつ岩魚だった。オショロコマだ。溪相や河川規模、川の流域を考えると岩魚が釣れても、アメマス系の白い斑点を持つ岩魚が釣れる筈だと思っていた。いや、正直に言うと、こんな下流でオショロコマが釣れるとは思わなかっただけか。

僕の考え過ぎなのかもしれないが、下流に位置する数々の砂防ダムによってアメマス系の岩魚は上流に遡上することが、出来ず源流域に生息するオショロコマが流下してきたのかもしれない。現に札内川などは、最上流の支流域に辛うじてオショロコマが生息しているだけであり、本流の殆どは白い斑点をもつアメマス系の蝦夷岩魚ばかりだと聞く。

I君はオショロコマを見るのは生まれて初めてで、赤い斑点を散りばめた魚体をみて「綺麗な魚ですね。」とつぶやいた。その釣りはそれ以上の移動もままならず、一匹のオショロコマの釣果で川を後にする。林道を下る途中で砂防ダムの事をI君に話す。魚道の無いダムが出来ただけで、川が変わってしまうんだと...

彼も何か感じる事があったのかもしれない。妙に真面目な顔をしていた。戸蔦別川を後にしながら、釣り場を考える。山脈からの本流域はまだ水量も多く、初心者では危険があるかもしれない。となると支流域か襟裳付近の小さな河川しかない。

一路、南をめざし広尾町を通過する。途中、交通情報の電光掲示板に「通行止め」の文字が見えたような気がした。黄金道路に入り二つ目の掲示板があった。【崖崩れの恐れあり】【音調別一目黒間 通行止め】。目黒の猿留川上流か、その手前の細流に入ろうと思っていたが、通行止めでは仕方がない。

車で行くことの出来る音調別（おしらべつ）より、林道を進む事にする。地図を見ながらY字になっている林道を右へ左へと進んでいく。最初は山を一つ越えた場所にある溪へ入る事にした。林道は、どんどん高

度を上げ、今度は下って川に近づくと川沿いに上流へと進んでいた。

岩魚狙いの釣行なので、上流へと進んでいく。やがて林道と平行するようになると、川は源流域の様相で落差が激しく壺を狙っての釣りが中心となりそう。標高も500mを越え霧がかかっており、熊の心配もあり、駐車地点を中心に竿を出す事にした。20分程周辺で遊んでみたが、釣果は僕の一匹だけ。落ち込みから流れ出しの深場で釣った岩魚だった。霧も出ていて気温も低く、魚の活性も悪い様だ。車に戻り、早い昼食をとることにする。

林道を下っていくと、空が段々と明るくなってきて晴れ間が覗いてきた。毎日が曇り空だった為、心がはずんでくる。山を越え、音調別側の溪を探ってみる事にする。林道から枝道を進んで行くと、広場で通行止め。しかも、50m位の長さが三面護岸されている。

この様な山の中なのに何故と疑問に感じるが、護岸の切れた下流に格好の深みがあった。護岸の切れ目から餌を流すとすぐにアタリがあった。青空の下で明るくなったせいなのか、今シーズンの釣りで一番明確なアタリだった。20cmを少し切るくらいの岩魚。続けて二匹目も釣れる。I君に下流のポイントを指示したものの、ポイントに対するポジションが悪く僕の釣った場所に戻ってきてしまった。ウェーダーを履かないでの試し釣りなので、手前側の深みを攻められないでいるみたいだ。対岸からだとなんて簡単なのだが、ポイント一つでわざわざ装備をするのも面倒ではある。

右手の土手を登り、倒木に乗りながらの釣りを。流石に上流からみて好ポイントだったので、二匹連続でゲット。I君に釣らせていけないと思い、釣り座へ案内する。後で聞いた話だが、僕が藪こぎしながら釣っているのを見て「あんな事して釣っている」と思ったそう。

釣る為には少々藪こぎも当たり前。いかにポイントに餌を上手く流すかを考えるのが大事なのだ。最初は溪に吞まれて当たり前。下手な師匠かもしれないが経験だけはある。

結局I君もこのポイントで一匹の岩魚を釣り、坊主を免れる。不良先輩の僕でも、後輩に待望の一匹が釣れると本心から「良かった良かった」と思う。

林道を下り途中で河原に下りれそうな廃道があった。降りて川を見ると上流と下流にポイントがある。下流のポイントは渡渉して、対岸からの釣りになる。I君にフル装備で下流のポイントを狙うように指示。自分は相変わらずの猫釣りで、ジーンズとトレッキングシューズのまま上流のポイントを釣る。

大きめの二匹をキープ。下流を見るとI君が近づいてくる。右手には型の良い岩魚が握られていた。一投目で釣れたそう。その下流のポイントは荒瀬から、ブツツケで下は深場になっている好ポイント。

「多分、まだ数匹は居るだろうから、頑張って」と言い、車に戻った。車から彼の釣っている姿を見ていたが、仕掛けを根掛かりさせたいらしい。時間をかけ仕掛けを作っている様だ。ヘルプの意味もありウェーダーを履きポイントに向かった。

近くで見ると絶好のポイント。下流に立ち餌を流すと良型の岩魚。続けて何匹も釣れる。魚が溜まっている様だ。小型の岩魚も多くリリースした後でも良型がかかってくる。普通は大型の魚が先に釣れるのが北海道の岩魚釣りだが、魚が溜まっている状態だと関係はないみたいだ。10匹程キープして竿をたたむ。

まだまだ魚は居ると思うが、残して釣るとというのが溪流釣りの鉄則だとI君にも遠回しに言うと、彼も素直に了解した。

I君も数匹の岩魚を釣っていたが、吞まれるケースが多かった様だ。吞まれるのは、アワセが遅い証拠。上顎にかかっているのが理想なんだよと教える。アタリとアワセは、口ではなかなか説明出来ないのが辛いところ。こればかりは経験からくるカンみたいな部分もある。特に僕の釣り方である下りながらの釣りを基本としたアワセの場合、糸を送り（緩める）途中の目印・糸の違和感をアタリとしているので言葉にしにくい部分がある。I君はのみこみが早い人間なので、釣行を繰り返せば上手になると思う。そのうち師匠の僕よりも、上手になったりするかもしれない。

帰り道に日高山脈から流れ出る大溪流を見せたく、豊似川に寄った。北海道には珍しく、溪谷に豊富な溪

水が流れている。豪快な荒瀬、深い淵、落差のある溪相の豊似川は、山女魚の禁漁中という事もあり流れは自然そのもの。橋から眼下に見えるその流れに、瀬音が鳴り響くのみ。

初めてみる日高山脈の大溪流に、I 君も何かを感じた様だった。「水が本当に綺麗ですね」「本当の溪流をみました」という意味の言葉を喋ったと思う。溪流釣りを教えて、溪の美しさを感じとって貰えたのか。そうだったら本当に嬉しく思う。

「来月からは山女魚に挑戦だよ」溪を歩き、野生の敏捷な山女魚を釣った時に溪流釣りをどう思うか聞いてみたいと思った。

※この釣行記は Niftyserve 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載したものです。(1997.6.8)

97' 解禁の釣り

例年7月1日に管内全ての河川が解禁になるが、北海道の溪流における山女魚人気を裏付けるように、有望と思われる河川はお祭りの様な人出となる。今年の解禁日は、平日にもかかわらず地元の釣り人を中心に賑わったようである。解禁より遅れること3日。今年の夏季休暇の一日目、自分にとっての解禁を祝おうと南十勝の溪を目指した。

昨年の実績から、数本の有望河川を絞り込んで一日に、数本の川を狙う事にする。解禁前の数週間、晴れの天気の続いた十勝の溪は、どこも水量が少なく水温もかなり上昇している。小河川の下流域だと、20度を越える水温を示している。山女魚狙いの場合20度という水温は微妙な温度ではある。この温度だと道央の河川だとウグイの住処となってしまう温度で、山女魚も生息出来ないわけではないが、ポイントの選定が難しい。

最初にA川の上流域に入溪する。水量がなく水深が浅いため、ポイントは落ち込みと淵だけになっている。先に人が入っていれば、厳しい釣りになるのは間違いのないところ。入溪地点から上流下流100mほど探ってみたが、アタリ無し。解禁後に入溪した跡もあり、一通りの魚を釣りきってしまった様である。減水してポイントの少なくなった小河川の宿命か。降雨後の増水を期待して、早々と退散する。

この様子だと上流域は、どこの河川も同じ状況だと判断した。渇水状態であり解禁後、数人は必ず竿を入れているだろう。この様な状況だと大場所のある本流域しか、釣りにならないと判断する。途中の釣り具店で、餌を求めると同時に情報を聞いてみると、渇水にも関わらず今年の山女魚は型も良く、解禁日は周辺の川全般で好漁という事だった。但し、河川によって型もかなり違うらしい。

昨年は解禁直後から不良続きで、例年山女魚のポイントだった場所に岩魚が居着いたり、解禁直後から中流下流は釣りにならない年だった。今年は好漁という事は、例年のセオリー通り下流域の荒瀬を中心に探るのが一番なのか。

昨年、山女魚の魚影が全くみえなかったB川の本流域に向かう。昨年の解禁日に罾に遭遇した場所でもある。釣り場に着くと、川をみないでも水量が少ないのがわかる。道は崖を最後に終わっているのだが、奥に流れる本流の手前に増水時だけ水の流れ場所がある。平水時は微かに水が流れているのだが、今日は完全に干上がった状態である。

本流に向かい、最初のポイントで餌を流しきったところでアタリがあった。強烈な引きを見せるが、魚が水面を切った瞬間、ウグイである事がわかる。この時期のウグイは産卵後ではあるが、体側のオレンジと黒の横縞が現れており、薄くなりつつも追星も認められる。30cm弱のウグイであったが、引きは強烈。ゲームとしてならウグイも悪くないのかなと思うほどである。リリースして上流へ向かう。

入溪地点が広い河原に瀬が中心の流れになっているのだが、200mほど遡行すると兩岸が狭まり岩の間を溪水が流れる溪相になる。この溪相の間は、荒瀬と大淵が連続しており釣り師なら大物に心躍らせる流れである。流心は、滝の様に流速も速く、狙いは岸スレスレの淀みの部分か。深い場所で速い流心を持つ流れは、淀みといえ、複雑な流れをもつ。渦を巻いての流れであり、流下する逆の方向に水流もある。岩魚は淀みそのものに付いている事もあるが、盛夏の山女魚は流心の泡の中の下に付いている事が多く、流れを考えないと餌を食わない。事実、淀みと流心の泡の境を流し流れが反転して再度、餌が流心に入っていく瞬間にアタリがでる。

重い流れの中に生息する山女魚は、合わせを入れた後、猛烈に抵抗する。糸が鳴り、竿が弧を描いた後に水面を割って出てくる。この時期の山女魚は水面を切った瞬間、真っ白な体を震わせ薄いパーマークを抱いた美しい魚体。晴天の多い十勝特有の色なのだろうか。このポイントで5匹の良型山女魚を釣り上げた。そのうちの二匹は、幅広山女魚。一段と魚体が白っぽく、体高のある見事な魚体である。体長は20～22cm前後の型揃い。新子も時々釣れてくるが、針と餌が大きい為に落ちる事が多い。逆に落ちてくれた方が僕

は助かる。新子釣りに関して色々意見があろうが、僕は新子釣りは反対の姿勢で溪流釣りをしている。新子の半分はサクラマスとなる雌であり、北海道の山女魚がサクラマスから生産される事を考えると、釣りの対象としては考えられない。

大場所上流は瀬の続く好ポイントで、ここでも例年、良型山女魚が釣れる。深い瀬で餌を流すと流れを横切る感じで瞬間的に餌に食いついてくる。シーズン最盛期、山女魚釣りの醍醐味が味わえる瞬間である。今回、この瀬で興味深い光景をみた。瀬を流れる仕掛けの目印に向かって、20cm程の山女魚がライズしてきた。夏季の釣りでは目印に食いつく事は珍しい事ではないのだが、中型の山女魚でしかもイルカのジャンプの様に真横に魚体を現した事は初めてだった。

今、思い出しても、スローモーションの様に山女魚が水面を割ってジャンプする様を思い出す。水面の釣り、すなわち毛針釣りも今日のように気温が高く晴天下では効果があるかもしれない。上流の堰堤跡まで大場所のみを狙って、同型の山女魚を5匹追加したところで今日の定量。計10匹を魚籠に入れ納竿する。

解禁後、初めての釣行で昨年になく豊漁。冷夏の昨年は7月下旬で既に婚姻色に染まりつつある山女魚がいた。やはり十勝山女魚は暑い夏が良く似合う。日光を受けきらめく瀬のさざ波から釣れるのが望ましい。

今年は楽しめそうなシーズンになると、次回に期待を持ちつつ帰路についた。

夜釣り

渇水の続いている十勝の溪流もここ数日は雨が降る天気が続いている。しかし、増水する程の量が降っているわけでもない。今日の釣行は、後輩を連れての釣りだが水量も無くまして昼過ぎに市内を出るという安楽な釣りであるので、釣果はどうだろう。

今年の南十勝の溪流は解禁後は順調と言われているけれど、7月の中旬は水量は豊富でポイントも多く、竿の入らない場所もあったため昼からの釣り、下手をすると夕方から少しだけ竿を振っても、釣果を得るのは難しい事ではなかった。

先週も水量がなく、中流域を狙っての下り釣りをしたのだが水量が極端に少ない為、深みのあるポイントは100m歩いて一つ、その次も100m歩くといった感じで、殆ど歩いているも同然だった。今回の釣行は初心者を連れてるので、歩いて歩いてという釣り場は出来れば避けたい。そう考え、水量のある本流に入渓する事にする。

日高山脈から流下する流れは、水量が少ないといっても冷たく清らかな流れで、下流と言っても不思議では無い場所でも溪流釣りが楽しめるのは、北海道ならではの事だと感じる。入渓直後から大場所が連続する釣り場なのだが、やはり全体の水量が減っているからだろうか。淵と淵の間にある瀬が、浅い緩やかな流れに変わってしまっている。新子ならともかく、幅広狙いでは、水深のある瀬が無くては釣りにならない事が多い。大きな落ち込みが連続しているポイントで、流心から岸よりの部分を狙うしかない。

後輩にポイントを教え、遡行を始めた。数個目の落差のある落ち込みの脇で、流れが巻いている場所があった。下流に流れた一部が、再び、上流に向かって渦を巻いている場所だ。流心は深い淵になっている。魚は流心落ち込み下に付いていると、判断する。ポイントの下流よりに振り込むと、糸は流れにのって上流の落ち込みへ入っていく。すかさずアタリが出る。20cm程度の良型山女魚だ。8月に入ったものの、サビはまだ出ていない綺麗な魚体だった。流すポイントを変え再度、餌を投入する。白泡の方向に餌が入ってしまったと思った時、糸がゆっくりと流れを横切った様に感じた。アワセを入れると重い魚信。それからゆっくりと竿を弓の様にしならせながら魚が走り出した。山女魚ではないのは分かり切っている。遡上したサクラマスか？後輩に声をかけ魚とのやり取りを楽しむ。

水中で黒い魚影が見えるのだが、なかなか寄ってこない。半分強引に寄せてくると水中で水玉模様の魚影がみえた。アメマスである。水中で見るアメマスの模様は美しい。遡上したアメマス特有の大きな水玉が、ジंकリアの溪水の中で必死に抵抗しているのがわかる。岸に寄せ、タモがないので糸をつかみ魚を放り投げる。魚をみて後輩が駆け寄ってきた。アメマスは見たことが無いのだろう。「うわ〜でかい」と僕が釣った魚なのに、興奮気味だ。スケールを出して魚の大きさまで計る始末。体長は40cmを僅かに切る39cm。しかし遡上した個体は体高があり、全長以上に魚が大きく見える。北海道の溪流では遡上アメマスの事を考えに入れて仕掛けを作る必要を改めて感じる。後輩にも、釣りの本で書かれている以上に太い糸を使用して仕掛けを作るように言っている。

この大場所の区間は短い。100mもあるだろうか。後輩は僕の釣ったアメマスをみて再び竿を振りだした。無理もないか。しかし、必要以上に同じ場所で粘っている。初心者ほどその傾向が強い。上流へ向かうぞと言われても、まだ....。

大場所の連続する区間を過ぎると、川幅全体が、今時期としては理想的な水深の瀬を中心とした流れになっていた。山女魚の瀬釣りも初めてなので、ポイントの流し方を一通り説明する。瀬の最下流で、すぐに一匹の山女魚が釣れた。後輩もそれを見て、ポイントを理解したみたいだ。数分後、良型の山女魚を釣り上げボウズを免れる。

ポイントを交互に更に釣り上っていくが、魚影は薄い。ときどき新子が釣れてくるが、良型山女魚は皆無の状態だ。予定の堰堤跡まで僕が気を抜いた時に一匹を釣り落とした。後輩は堰堤下で粘り幅広と思われる

山女魚を釣り上げたと思った瞬間にバラしてしまった。先輩思いの良い後輩である。

本流域を後にして、一旦車に戻ることにする。途中の大場所で、後輩が山女魚を一匹釣り上げる。段々と要領を得てきたようだ。車に着いた時、既に6時近くになっていた。

遊びだと断りながら、上流域を覗いてみることにした。下流と違って、上流は水量が極端に少なく、解禁直後に入った時の半分ほどだった。入渓地点から一旦上流へ遡行するも、極端な水不足で釣りにならない。僅かにある落ち込み部の深みを狙うだけであるが、アタリは全くない。下流に向かい、所々にある深みを中心に餌を流す。

倒木が流れを横切る好ポイントがあった。後輩に先行させながら、倒木の間を狙うも、長竿ではマトモに仕掛けを振り込む事も出来ない程だ。やがて、鈴を鳴らしながら後輩が上ってきた。あまり芳しくないらしい。表情も心なしが、暗いものがある。極端な提灯仕掛けを即席で作り、今しがた後輩の釣っていた流れを下っていく。

木々の生い茂る流れは、夕暮れを過ぎると本当に暗い。やがてボサ場を抜け、河原の開けた場所で一服する事にする。辺りは段々と暗くなっていく。後輩は、先の下流で釣れた魚の腹出しをしている。開けた浅い瀬ですわったまま竿を振っていると、先ほどアタリの無かった流れから良型の山女魚が飛び出してきた。

この頃から、流れに餌を送り込むと新子を中心なのだが、アタリが活発に出ようになってきた。

既に目印も見るのが難しい程、日は暮れている。少しの距離とはいえ、山間で車から離れた場所で釣りをするのは危険だ。入渓地点にアタリの全く無かったトロ場があるのを思い出した。

「入った場所に、深場があっただろう。そこを狙ってみよう」。急ぎ足で、暮れていく渓を戻る。入渓地点に戻った時は、既に夕闇が迫っていた。水面が光っているのが判る程だ。暗い河原で餌を針に付けトロ場に仕掛けを入れる。仕掛けは一体どこを流れているのかも、全く判らない。勿論、目印は全然役にたたない状態だ。

殆ど目隠しの状態で、着水音を聞き、流れに仕掛けが入った事が判るほどである。流れにまかせて仕掛けを流していると、アタリは殆どない。しかし、竿を送り込み誘いを入れると、すかさずアタリが出る。アタリと言っても、手の感触だけだ。新子が盛んに餌をつついていて判る。しかし、ときどき新子とは違う感触が伝わってくる。糸を緩め、アワセを入れると暗闇から魚が飛び出してきた。

その少し上流に、小さな落ち込みがある。明るい時間にその場所をみると、せいぜい膝下の深さまでしかない場所だ。先ほどは全くアタリがないポイントだった。目見当で仕掛けを入れると、直後に大きな魚信。アワセはもう要らない。手探りで魚を取り込む。

その上に更に浅いトロ場があった筈だ。岸から木が横たわっているのが暗い中にも判る。この場所も餌が水に入った瞬間に山女魚が釣れた。後輩を呼び、更に上流にあるポイントを狙わせる。暗い中で長竿。しかも長い仕掛けの彼には難しい場所だったのかもしれない。多分、岸からの木に仕掛けを引っかけたのだろう。数回竿を振った後竿を畳んでしまった。その直後に僕の竿に魚信。しかし針先が甘いせいかバラしてしまった。その後、後輩と同じように仕掛けを引っかけたようで、あえなく納竿を余儀なくされる。

針先も見えない状況で仕掛けを作ることは出来ない。ライトでもあれば別だが、溪流の餌釣り師でライト持参のわけではない。

そのまま帰路につき家で魚をみると、暗闇の中で釣れた山女魚は、全て体高の高い幅広山女魚であった。

※ 1997.8.2 Niftyserve FFISHF-17 瀬音会議室に投稿した作品を転載しました。

桜の咲く頃

例年より二週間も早く桜が開花した十勝だが、その陽気が嘘のように気温の低い釣行日だ。目的の川に着いたとき車内の外気温計は4度と表示していた。下見をした先週も気温は低かったが、今回は木々の緑が増え春らしさを感じる。所々に残っていた雪も消え失せている。今回の釣り場は、ホームグラウンドの日高山脈から流下する河川の支流。流程が短い河川であり、雪の少ない十勝側という事もあり、雪代は既に出終わり、夏場の平水よりもやや多めの水量であった。

身支度を終え、ポイントを探しながら河原を歩く。季節柄、殺風景なまで開けた河原なので、移動が楽なのは良い。逆に言えば、魚から人間の姿をみられやすいわけで、意識的に川から離れた場所を歩いて移動する。

支流とはいえ、北海道の溪流は落差が少なく、瀬が多い。このため教科書のように、シーズン初期は淵狙いなどというセオリーが通じない。淵らしい淵がないのだから当たり前の話で、出来るだけ水深があり、なおかつ流れの緩やかな場所がポイントとなる。

気温同様に水温も低いとみえ、ここぞと思うポイントからも反応は無い。それでも入渓場所より100mほど釣り下った場所で、初めて魚の反応があった。落ち込みに続く岩盤のプールへ餌が流れたとき、魚の追いが偏光グラスを通じて見えたものの餌の手前でUターンした。昼過ぎからの釣りなので、先行者がいたのか。盛期なら飛びついてくる状況で、Uターンは厳しい。

今日の仕掛けは、0.6号の通し。オモリは最小で糸を緩めながらの下り釣りだ。数回のチャレンジを、するものの追いは無かった。しばらくポイントを休める必要があるそうだ。そう考え移動することにする。魚がいるのがわかると、現金なもので釣る意欲が増してくる。川を下りポイントを探ってゆくが、相変わらず気温は低く、竿を持つ手がかじかんできた。かなり握力も下がっているようだ。ベストからグローブ取り出し手につけるものの、指先が冷えるのは辛い。

やがて、落ち込みが続く岩場ポイントが近づいてきた。盛夏では、幅広の実績のある好ポイントだ。数段目の落ち込み脇の淀みを流した時、水流に沿って流れていた糸が止まった。思わずあわせると、重い魚信。河原のないポイントなので強引に抜きあげ、高場の岩に飛ばして取り込む。背中が緑がかった蝦夷岩魚だ。大きさを測ると31cm。思わず顔がほころぶ。この川での上の下といった大きさか。

その後暫く釣り下るものが寒さに釣欲も失せ、熊笹を漕いで林道に上り、川を眼下に眺めながら上流へ向かう。Uターンした魚にチャレンジするため、途中で川に降りられる場所を探し遡行に切り替える。やがて、目的のポイントがみえてきた。今回は一発勝負に賭けるしかない。ポイントを遠巻きにして、プールのやや上流に仕掛けを放り込む。竿を操作して、大きな誘いをいれた一瞬の後、白く光る魚影が見えた。アワセをいれ水面を切った魚はパーマークの綺麗な山女魚だった。鰭は既になくなっていて盛夏の幅広のように白銀色をしているわけでもない。図鑑でみる山女魚とそっくりな魚体だ。

狙った魚を釣り上げた時ほど、満足感を感じるものだ。足取りも軽く、車に向かう自分を気分屋だなと思う。車から、普段は釣りでは使わない一眼レフを取り出す。気温は低いものの、木々は若葉をつけ河原には落の臺が出ている風景を撮りたくなったのだ。十数枚を撮影して、上流域の様子をみようと思えば車は走らす。落差が少ない北海道の溪流と先に書いたが、源流近くまで進むと林道も勾配を増し溪も険しくなる。それでもポイントがはっきりしてくるので、今時期は効率が良いかもしれない。トレッキングシューズのまま溪に降り立ち竿を振ると、壺毎に当たりがでる。しかし、餌を追うのは小型の岩魚ばかりだ。釣ってはリリースを繰り返し、魚と遊んだ今日の締めくくりの釣りだった。

※ 1998.4.26 Niftyserve FFISHF-17 瀬音会議室に投稿した作品を転載しました。

山女魚解禁

平日に山女魚の解禁を迎えた98年の溪流釣りだが、時間の都合がつかず4日の早朝に釣り場を目指した。天候は曇りで気温も低い。事前の情報では解禁日は好漁が伝えられていたが、その後の降雨により状況は変わっている筈だ。釣り場近くの橋から川をみると水量が多く、平水の倍は流れているようだ。入渓予定の橋には既に数台の車が駐車されており橋から下流、上流には既に竿を振る釣り人の姿がみえる。釣り人の気持ちとして、混み合った釣り場よりも出来れば一人で釣りをしたいものだ。

農道を走り500m程、移動して入渓する。水量が多いために逆にポイントが少なくなっているように見える。解禁とはいえ、7月の山女魚は水温の上昇と共に瀬に付いていることが殆どだ。出来れば川底が小砂利で、流れに変化があればポイントとなる。しかし、水量の増した目の前の流れは、川岸がかろうじてポイントとなっているものの、川全体は白く波立っている感じを受ける。普段では直ぐにポイントを支流や上流に変えるところだが、解禁直後の休日とあってはそれもリスクがあり、取りあえず竿を振ってみることにする。

上流からは釣り下りの釣り人がいるだろう。入渓点から時間を決めて釣り下り。まずは小手調べで30分とする。水量があるとはいえ、基本的にはチャラ瀬が多い流れ。しかし、越年ものの山女魚のポイントにはならないのが辛いところ。彼らは水量豊富で深い瀬を好んでいるが、本流域で水量が多すぎるのは辛い。見た目と結果が一致するのは悪い予想をしたときが多い。30分後に釣れた山女魚は7寸5分の越年山女魚一匹のみ。このまま釣り下れば一日竿を振れば釣果と言える数は出るかもしれないが、川沿いに林道もなく川通しの釣りを考えるとリスクが大きい。

結局、この川を諦め川を移動することにする。雨で増水しているのは、他の河川も同じこと。時期的に最上流域や小さな沢は、岩魚の住処になっている筈だ。中規模の支流が一番望ましい。数本の支流を訪れ、先行者のいない場所を探し、入渓した。その支流はかつて訪れた事もあった場所だが、貧果が続いて足が遠のいていた場所だった。しかし、人混みで竿を振るよりはマシというもの。

それでも、入渓した場所を釣り下って落差のある大場所区間では、越年の綺麗な魚体の山女魚が数匹、それに岩魚が少々混じるという釣果を得られた。入渓点へ戻り、逆に遡行を始めると段々と濁った溪水が流れるようになった。林道には数台の車と重機が停まっている。

後で判った事だが、毎年の様に林道が降雨で削られているのを防ぐ為、側溝を敷設して雨水が林道上を流れないようにしているらしい。それはそれで結構な事なのかも知れないのだが、泥水が溪に入ってしまう心配が先に立つ。川の濁りといっても釣りになるレベルではあるけれど、透明な溪水ばかりを見ている僕にとっては何やら複雑な気持ちになってしまう。

この濁った瀬を流すと、一匹の幅広と明るい色をした岩魚が連続で釣れた。結局、この支流で4匹の越年と2匹の岩魚。大漁とまではいかないが今時分の状況を考えると、満足出来る釣果。大きさは全て7寸から8寸の型揃い。気温が上がる7月中旬には幅広も期待出来る流れだろう。

次の日は所用があり、天馬街道を通過して、夕方十勝に向かっていた。雲は多いものの、青空をみていると竿を出したくなるのは十勝の溪流釣り師だ。初日に諦めた溪を訪れてみると、一日経った流れは水量もかなり落ち着き本来の姿に戻りつつある。川筋が二つに別れている場所が、丁度良い水量となっている。喝水になれば、釣りにはならないだろう。それでも魚影はそこそこ濃く、短い区間で3匹の山女魚。先に進むと先行者が見える。どこから上ってきたのだろう。入渓場所には、車は無かった筈。更に、下流域から遡行してきた釣り人であろうか。その健脚に敬意を表し、退散する。夕暮れではないけれど、陽は日高山脈の稜線に吸い込まれようとしている。僅かに色づいた西の空をバックミラーに眺めながら、国道へ向かって車を走らせていると、先行車の前を一頭のエゾシカが横切っていった。かなりの距離はあったのだが、速度が出ているので思わず急ブレーキを踏んでしまう。なにかずれている感じのする今年の解禁後の山女魚釣りだった。

1998年7月4日

夏の日高路

日高管内の釣り場を訪れるのは、数年ぶりのことだった。十勝で生活するようになり、地元の溪流で十分に楽しめるシーズンが続いたので、足が遠のいてたのだ。しかし、昨年の秋に豊似と浦河を結ぶ天馬街道が開通して、日高路も日帰り釣行出来る様になった。

何よりも魅力的だったのが、日高には未だ未踏の溪が残っているからだ。未踏というのはあくまでも自分にとっての話だが、初めての溪はどの釣り人にとっても期待が高まるものだと思う。

M川にかかる橋のたもとに車を止め、手早く身支度をして入溪した。溪相は抜群で川底には大小さまざまな石があり、流れに変化を与えている。緩やかな蛇行と適度な落差。淵と瀬が交互に現れるバランスのとれた溪流だ。

今回から、昨年の末に郡上へ出かけた時に手に入れた、郡上魚籠を腰につけた。北海道でこの魚籠を使って、山女魚釣りをしている釣り人に会った事はない。当地では山女魚籠と呼ばれる丸四角い魚籠を、肩からかけているスタイルが一般的だ。しばし、溪を歩くと郡上魚籠のバランスのとれた機能美に感心する。腰板が付いているので、魚籠が不必要に揺れる事がなく、また腰紐を使って固定しているので肩が凝る事もなく至って快適と感じる。

釣りの話に戻るが、橋の近くは入溪者が多いのか、魚の魚影も薄い。それでも数百mも釣る上る頃に、待望の一匹目を釣り上げた。体長12cm位の越年山女魚だ。魚籠に入れるには型が小さく、リリースする。釣り上るにしたがい、魚影も濃くなって型も良くなってきた。

深みや淵を探ると、瞬間的な早さでアタリが出る。しかし、流石に夏山女魚だ。アワセを一度ミスすると、二度目は全く反応しない。これが下りで釣っていた場合は、アワセとアタリのバランスを体で覚えているので釣果は上がるのだが、一般的な上り釣りは殆どすることが無いため戸惑う事が多い。

やがて、橋を渡る車の音が聞こえなくなってきた。既に、魚籠には8匹の良型山女魚が収まっていた。一日の釣果としては、これで充分。竿を畳み川通しに入溪地点を目指す。この頃になると日はかなり傾き、水面が逆光に輝き、底が見づらい。

溪流では上りよりも、下りの方が危険がある。足下を確かめながら下っていく。川底の岩には、沢山の川虫が動き回っているのが見える。また水面には、カゲロウがゆらりゆらりと羽音もたえずに舞っていた。ようやく夏らしさを感じる季節になったと、感慨深く溪を後にした。

早春の西別川

道だけを見ていると先週の大雪が嘘のように感じる西別川流域だが、丘に広がる牧草地は白い雪と枯れた草木の荒涼とした風景が広がっていた。中西別の市街地を抜け、西別川本流の橋を渡る。水量は夏と変わらないが、雪代の影響と思われる白く濁った水が流れている。橋の周辺は日当たりが良いのか残雪は少ないものの、既に入渓者がいることを知らせるRV車が近くに停まっていた。

橋からの入渓をあきらめ、川沿いの道を上流へ向かい途中の農道を進んでいく。ここは牧場脇から楽に入渓出来るポイントなのだが、この場所にも既にワゴン車が路肩に駐車してある。夏のシーズンは明け方直後に入渓しないと先行者だらけということは理解しているのだが、早春のこの時期に既にこれほどの釣り人がいるとは予想もしていなかった。

近くにもう一つある入渓ポイントまで行ってみて、先行者がいる様であれば、その場所に入渓しようと考えながら車を走らす。目印の建物があり道を左折して突き当たりを直進する林道がある。だが、入り口が吹き溜まりになっており、4×4の車とはいえ、これ以上進むことは出来ない。

林道には先行者を示す足跡もなく、先週の大雪から誰一人も入渓していない場所と思えるのだが、流れまでの距離を考えると入渓を躊躇してしまう。しかし、午後2時近くになっており、季節柄これ以上の釣り場の移動は難しく、雪中ラッセル覚悟で釣り支度をととのえた。

真っ白な林道を歩いていくと、日当たりの良い場所は土が顔を出すまで解けている。しかし、吹き溜まりと思われる場所は膝上まで埋まり、腿の筋肉が段々と張ってくるのが判る。やがて支流を渡る橋が見えて雪原が目の前に現れる。この支流も溜まりにはアメマスが入っている事が多く、夏の間は橋の上からルアーを追ってくるアメマスを見ることが出来る。しかし、今回は魚影もなく、薄曇りの光を受けた流れを眺めるだけにとどまった。支流を後に雪原を進んでいくと、ザラメ状の雪の表面が堅くなっており、歩く度に薄氷を割るような音がする。

なだらかな傾斜の牧草地だが、風の抜ける場所はかなり狭い様子で極端に雪の少ない帯状の道になっている場所がある。そのまわりは吹き溜まりで、深いところは腿まで埋まる雪がある為、歩くルートを探しながらの横断となる。

夏の倍近くの時間を費やし、川の周りを覆っている河畔林がようやく近づいてきた。河畔林を抜けると、水面までは急な斜面になっている。林の中は雪解けは遅く、深い雪に阻まれながら下りられる場所を探すのに手間取ってしまう。上流方向に傾斜の緩やかな場所を見つけゆっくりと下っていくが、斜面は落ち葉で非常に滑りやすく枯れた笹を掴みながら、まるで滑り落ちる様に斜面を下り、冷や汗をかきながら川岸にたどりついた。

川岸はところどころ雪に覆われ、しかも、岸から迫り出す様に残っている。誤って岸の雪を踏み抜く危険もあり水辺を避け、斜面近くを移動していく。橋でみた流れと同様に、近くでも濁りは強くウェーディングはかなり危険があり、必然的に雪のない場所を探して竿を出すことになる。絶好のポイントを見つけても雪に阻まれ竿すら振れないコンディションは残念だが、晩秋以来の釣行はやはり嬉しいものだ。

竿を出せる場所を求め、雪の中を無心に歩きポイントを探している。やがて、この川には少ない河原のある場所が目にとまった。その下流に倒木があり、その流れに上には木が生い茂っている。倒木の上流へキャストし、軽くアクションをつけながらラパラを泳がす。濁った水の中で、ユラユラと泳ぐラパラを足下まで引ききって第二投目。今度は少し岸寄りにキャストして二三回のアクションをつけた時、ドンというアタリがあった。ジジッとドラッグが音をたてたあと、魚が走り出しジャンプする。倒木の下へ逃げ込もうとする魚の体側に、レッドバンドがみえる。数回のやりとりをした後、少し強引に引き寄せると足下でレインボウが走り回る。岸際に寄せ、口に指をいれハンドランディング。

岸の残雪に横たえ、フックを外しメジャーを当てると41cm少々。トロフィとは言えない中型サイズだ

が、ネイティブな黒点の多い西別川のレインボウと思うと、何とも言えない嬉しさがこみあげてきた。数枚の写真を撮り流れにかえすと、身をゆっくりとくねらせながら深みに消えていった。今年初の釣果を得て、雪の中を足取りも軽く進んでいく。途中、竿の出せるポイントを1時間ほど丹念に攻めてみるが、アタリはなく気温の低下を感じ納竿とする。

滑る斜面を懸命に登り雪原を歩いていくと、日差しは弱くなり風も出てきたのを感じる。支流を渡る橋の上でひと休みしながら岸をみると、黄色い花が咲いている。フクジュソウ（福寿草）だ。アイヌ語でチライアパッポという名を持つ。イトウが産卵の為に遡上してくる季節に咲く花ということで、チライ（イトウ）の名がついたようだ。残念な事に今ではイトウの姿をみることは希で、フクジュソウだけが春が訪れたことを知らせるように咲いていた。

1999年3月27日

初夏の西別川

西別川に着いた時、既に日は高く昇り青空が広がっていた。川の方向を見ると、朝霧に覆われて光の中に河畔林の影がみえていた。釣り支度を終え、牧草地を川に向かって歩いていく。風もなく、川の流れる音も聞こえない静かな牧草地に、名も知れぬ鳥の鳴き声が聞こえる。河畔林と平行に川の上流を目指して、歩いていき、途中の崖の上から西別川の流れを見ると、川に隣接しているのは蛇行の頂点ということが良く判る。この頂点から上流、下流とも遠ざかって更に奥で蛇行して手前側に流れているのだ。

数カ所、牧草地と隣接している場所を通り、笹の生える斜面を降りていく。岸まで降りて西別川の流れをみると濁りが少し強いようだ。先週、訪れた時は澄んだ溪水が流れていたのだ、が流域に雨でも降ったのだろうか。ウェーディングしながら、釣り下りを開始する。岸に多数ある倒木の下を、丹念にせめていく。しかし、魚の追いがなく、少しの焦りを感じる。深みのある場所では、岸へ上がりトクサと灌木をかき分けて進んでいく。

河原の少ない西別川だが、砂礫と土の場所には多数の入渓者を物語る足跡が残されている。この一週間の間でも、多くの釣り人が歩いたことを物語っている。誰にでも判るポイントは、既に何人もの釣り人が竿を出しているに違いない。しかし、濁りの入った流れは竿抜けしているポイントを簡単に判るわけもない。わずかに流れの変化している場所を探し、丹念にルアーをキャストしていく。それでも魚の出は良いとは言えず、入渓暫くした頃、バイカモのゆれる場所から待望の一匹目。20cm位の越年山女魚だ。はっきりとしたパーマークが綺麗な一匹だ。魚を傷つけぬ様、慎重にフックをはずし流れに戻す。

それから暫くというものの、忘れた頃に小場所から型が良いとは言えないアメマスがアタックしてくる。先週の雪辱戦を考えていた自分の中に、諦めに似た気持ちが生じてきた。更に釣り下っていくと川幅全体を遮るような倒木があった。倒木の上流、対岸ヘラパラをキャストする。数回のトゥイッチングした時にガツというアタリ。魚は上流に向かって走りジャンプを繰り返している。ニジマスのファイトを楽しみながらラインを巻いていくと、寄ってきたのは35cmとまづまづの型といったニジマスだ。

白い魚体に黒点の多いタイプ。記念に写真を撮りリリースする。更に釣り下りを続けていくと、濁りが少し強くなっている気がしてきた。川底の確認が危うくなり、ウェーディングするには少しの危険を感じるようになる。右に大きく曲がる場所で、川は大きく牧草地から離れる様相をみせている。このまま下ってみたいという欲もあるのだが、昼前には車に戻る予定だ。このまま川を下った場合、脱渓出来る場所も判らず危険を冒すことは出来ない。

すり足で砂礫の川底の様子を伺いながら、川を渡っていく。途中、倒木が沈んでおり、その下流が急に深くなっていた。この時、引き返す事も可能だったのだが、対岸に渡りたいという思いが勝っていた。足の裏の砂が流されていくのを感じる。そして押しの強い西別川の流れは、体を下流に押しだし、既に後戻りが出来ない状況となった。覚悟を決めて下流斜めに歩いて行く。脇まで水に浸かりながら、ようやく対岸にたどり着く事が出来た。

岸から急な笹藪の斜面をよじ登ると、河畔林が開けているのが見えた。その奥には緑色の牧草が広がっている。国道近くの送電線も見える。この方向に歩いていけば、駐車している車が見える筈だ。牧草地を歩いていくと、5分ほどで車に到着した。川を釣り歩いているのが4時間。入渓まで歩いた時間を合わせても10分足らずの距離を、釣りで4時間かかったことになる。釣りをしながらという事を差し引いても、川の蛇行がすごいことが判る。濡れたシャツを脱ぎ捨て水を絞り、Tシャツ姿で車内で睡眠をとった。前日から殆ど眠らず釣り場を目指していた為、目を閉じているだけで直ぐに熟睡出来るのが有り難い。二時間後、暑さに耐えられず目を覚ますと、既に昼を回っていた。車外温度をみると26度となっていた。根室地方では、珍しい暖かさだ。川の濁りと魚の出を考えると、転戦する気力も薄れてきた。それでも西別川の美しい流れを見てみたい気持ちがあり、上流へ向かい車を走らせる。数カ所の橋から、川にゆれるバイカモや木々の緑

を眺め数枚の写真を撮影する。帰り道、下流側にあるサケマス孵化場の看板を見かけた。看板に沿って車を走らせると、孵化場を過ぎた場所に橋があり、その脇に川へ進む小径がある。愛車を乗り入れ岸に腰掛け川を眺める。岸の流れの中では小さい魚がたくさん泳いでいた。目を凝らせて見ると、可愛いながらも黒い点々を持っている。生まれて間もない山女魚の稚魚だ。天然産卵したものだろう、大きさにかなりのバラツキがあり、既に生存競争が始まっているようだ。

この上流の流れは浅く、バイカモも多い溪流だ。車から竿を取り出し、スピナーを結んで流れに任せているとコツンというアタリとともに竿が曲がっている。軽いアワセをいれラインを巻き取ると、15cmの小さな山女魚が釣れた。小さいながらも川の豊潤さが魚体に現れており、体高がある丸々太った山女魚だ。リリースすると、まだ人慣れしていないのか足下の石の間で尾を振っている。やがて、ハッと気がついたように、流れの中に消えていった。

1999年6月12日

凍てつく原野にて

轍に溜まっている水は凍り付き、土も硬く締まった林道を進んでいくと、やがて終点のゲートが見えてきた。広場の笹原に車を止め、外に出ると釣り場の河口が見える。身支度を終え、林道のゲートを越え熊避の鈴を鳴らしながら道を下っていく。かなり古い林道であることは間違いなく、丘陵近くになると道なのか牧草地なのかの区別がつかない。

釣り場は道の消えかかる場所から、右手に見える湿原を進むのが近道だ。湿原を進むと、谷地坊主の間に張った氷が歩くごとにバリバリと音をたて割れていく。もともと湿原は決して歩きやすい場所ではないのだが、割れる氷は足に負担をかけ、氷点下の中を歩いているのに汗ばむくらいだ。15分ばかり歩くと河口が見え、その上流の淵では白鳥が羽を休ませている姿がみえるようになる。ここまで歩くと、釣り場まではもう少しだ。

結氷を心配していたが、水面は開いており満潮なのか水量もかなり多い。道東の河口域の釣りは、潮の状態で釣果に影響する。干満どちらにしても、水が動いている時が勝負の様だ。対岸へ向かってキャストを始めると、直ぐにラインが絡まる。気温が低いため、ラインのしなやかさが失われているせいだ。感覚の薄れた指で絡んだラインを直し、必要以上にサミングを効かせてキャストを繰り返す。

厳寒期と比べれば寒さはまだまだの状況だけど、10投もすればロッドのガイドが凍りつき負荷となり、リールを巻く手応えに違和感を感じるようになる。水温が低い為、水にガイドを浸けても凍ったままだ。しばし、キャストを中断しガイドを指で暖めて氷を解かさなくてはならない。

数投して反応が無いと、ルアーを替え、またキャストを繰り返す。狙いのアメマスは、秋から早春の魚がシーズンだ。しかし、結氷寸前の水温では底でじっとしている様で、数週間前に見られたサイズも少ない。事前に予想していた事なのだが、底を引かないと駄目なようだ。小型のハスルアーを取り付け、水底近くで踊らせるようにアクションをつけると、フォーリング中にガン！とアタリが出る。しかし、この釣り方は居合い抜きにその瞬間が勝負の釣りで、なかなかフッキングが難しい。それでも数回のバラシの後、慣れた様にアメマスが姿を見せてくれた。大きさは35cm位。まあ、小さくも大きくも無いという平均レベルだ。

しかし、この大きさのアメマスが、フッキング後にスピード感溢れるファイトをしてくれるのだ。40台の後半を境目に、スピード感は薄れ、反面トルクのある重戦車の様な引きをするのがアメマスという魚だろうか。

10匹近くのアメマスを釣った頃、上流を見ていると風で波立っている場所にムラがあるのに気が付いた。それが段々と近づいてくるのだが、ルアーをキャストして水面に着水した瞬間、コンと音をたてルアーが飛び上がる。氷だ！上流の淵で凍ったものが、風で岸を離れ流れてきたのだろう。氷は極めて薄く、1mmもない。しかし、海釣りの錘ならともかく、軽いルアーは氷の前にはどうすることも出来ない。

必然的に水面の波立ちを狙ってのキャストとなるけど、流れてくる氷も計算に入れないとリトリブ中にラインが引っかかる。長いこと釣りをしているが、氷の間で釣りをしたのは初めての事だ。しかし、この氷は厄介だ・・・そう思っている矢先にアタリがあり、良型なのかトルク溢れる引きでラインが氷を切り裂いていく。シャリシャリシャリと音をたてている様に氷の中をラインが走るのだが、やはり氷は厄介物だ。ラインにおかしなテンションがかかったせいかフックが外れてしまったようだ。

風向きの関係か、自分の居る手前に氷が流れてくる様で河口の浅瀬を渡って対岸へ向かう。ここは先日のOFFでS氏が二尺あまりのアメマスを上げたところだ。あわよくばの気持ちでルアーを数回、キャストするものの水底に水草が多く、底を引くには少し辛い。やがて流れてくる氷も無くなり、アタリも遠のいてきた頃、この場所の上流で小型ジグにかえ底をゆっくりと引いているとグンという重いアタリがあった。これまでのアメマスとは段違いのファイトで50cmは確実だと思った。

ドラグが断続的に音をたて左右に走り回る。やがて水面に姿を現したのは遡上間もないと思われる銀ピカ

のアメマス。ランディングしてメジャーをあてると47cmと3cmも満たない。少し落胆していると入渓直後のフライマンが声をかけてきた。「おはよう。良い型じゃないですか」。「まあまあですかね」と答えるものの、誉められても素直に喜べるサイズではない。先日、S氏の60cmを見ているからだろうか。

冷静に考えると、このフィールドに通い詰めていると、魚の大きさが麻痺している感がある。夏の西別川でコンスタントにこの大きさが釣れるか？否だ。北海道とはいえ当たり前の様に40、50という魚があがるのは道東のフィールドの限られた季節でしかないのだ。このことを忘れず、恵まれたフィールドで釣れる素晴らしさに感謝しなければならないと感じる。

幾度と繰り返したキャストイングに腕の疲れを覚え、川岸に腰を降ろし煙草をふかしていると、後から声が掛かった「鈴木さんじゃないですか？」。振り返ると北海道のフライフィッシングHPを主宰しているH氏だ。このフィールドの道案内をして頂いたフライフィッシングの巨匠である。既に納竿宣言をしているH氏だが話を聞くと前日の夜、札幌の仲間から電話が入り 急遽遠征となったようだ。

人のことは言えないが、釣りバカは何処にでもいるものだ。フィールドの状況を話しながら、並んで釣りを始める。H氏はストリーマーを引いている。同行のメンバーは、スカッドパターンとインジケータの組み合わせ。他のメンバーも各人違ったメソッドを用いている様だ。爆釣とは言えない状況だが時折、複数のロッドが弧を描いている。やがてフライにもルアーにも反応が渋くなってくる。朝は豊富な水量があった河口だが、干潮になったようで水位が下がっている。

あと一匹で最後とアメマスが釣れる度に思うのだが、一匹釣れると、あと一匹と切りがない。つくづく自分という人間は意志が弱いと感じる。そんな事を思っているとラインが左右に走っている。重く変わったファイトに首をかしげながらラインを巻き取ると、何とヌマガレイだ。珍客の流れに戻し、H氏を暫しの会話を楽しみフィールドを後にする。「来年、また会いましょう」と再会を約束して釣り場を後にした。

※この釣行記は @Nifty 釣りフォーラム瀬音会議室にアップされた発言を転載し一部加筆修正したものです。
(1999.11.28 #21921)

春の原野を釣る

車止めのゲート近くに停車して、徒歩で林道を下っていくと、林道に深い轍が刻まれている様に見える。でも、それは二本の轍の間の土が、凍結によって盛り上がった為だ。霜柱の様に地中の水分が凍り、そのままの形で解けてしまったそれは、上を歩くと新雪の様にズブズブと埋まってしまう脆さをもつ。所々に穴が開いていて、10cm以上の深さがあることもある。林道を歩くだけで、冬の厳しさが想像できるというものだ。

この林道を歩くこと15分。やがて、道は放牧地である原野に溶け込むように、姿を消している。ここから釣り場までは、約20分。笹原と谷地坊主が密集する原野を歩かなくてはならない。それでも、馬の通り道が所々にある為、雪で覆われていなければ歩行はそれほど困難な事ではない。点々と谷地坊主の広がる原野を横切り、河口方向の奥に光って見えるのが釣り場である。釣り場上流の方向を望むと、水面に白鳥が浮かんでいるのが見え、寒々しい景色の中に暖かさを感じる。しかし、海の近くは、強く冷たい風が吹いている。足下には茶色の土と緑が薄れた笹がみえるだけだ。

釣り場の雪は殆どなく、水辺近くに解けきらない氷が僅かに残っている。川は全て開いており、水も透明度が高く、水面はアメマスと思われるライズが出ており、魚の活性は高いようだ。ガイドには既にラインが通っており、釣り場ではルアーをセレクトするだけなのが有り難い。もっとも、釣り仕度を何処でするかだけの違いなのだが、ポイントに着いて直ぐにキャストが出来る方が僕は好きだ。

アメマスの反応を見るため、ハスルアーをセレクトして第一投。着水と同時にロッドを軽くあおり、フォーリング。ラインを見つめながら少し時間をおいてアクションを加え、そしてフォーリングの繰り返し。ルアーの師匠に教わったジグ的なハスルアーの使い方、テクニックの一つだ。

数回投げても反応が無く、少しの不安を覚えながら、RAPALA CD5の黒金ヘルアーを交換し、キャストすること数回。対岸のフライマンが魚をかけている姿に見とれていると、ゲン！という手応え。しかし、アワセが遅れて、数秒の後にフックが外れてしまった。他人の釣果は気にせず、己の釣りに集中せよということか。

気を取り直して、海風の中で黙々とキャストをしてリトリブ。手を変え品を変え、買ったばかりのアワビ張りのフォローティングミノーで、ようやく一匹目のアメマスを釣った。大きさは35cmくらい。まあ、どこにでもいるというサイズなのだが、ファイトは強烈だ。決して緩めているわけではないリールのドラッグを慣らし左右に走り回る。普通、アメマスという魚は数秒走り、それから休み、また走るというファイトをするものだ。しかし、一気にラインを引き出し、急展開し手前に向かってくる。しかも、底へ底へと潜るようなファイトをする為、ランディング直前にならないと大型が掛かったのではと、勘違いしてしまうほどの抵抗を繰り返す。

ここで釣れるアメマスの殆どは中小型のアメマスだが、そのファイトは北の野生を感じさせる。一匹のアメマスが釣れてからというもの、次第にエンジンが掛かってきたのかルアーを操るロッドアクションも決まり、飽きない程度に元気なアメマスが竿先を絞り込んでくれた。但し、河口域の狭いエリア故、特定のルアーに当たるというわけではなさそうだ。数投してアタリが遠ざかると、暫くは無反応が続いてしまう。場所を変えルアーを変えなど何か変化があるとまたアタリが出る。これの繰り返しだ。ルアーを見切られるのが早いということなのだろう。しかし、反応しだすと連続でアタリが出るので、精神的には満足出来る。

結局、昼過ぎから釣り始め夕方4時少し前までの3時間半で、20匹のアメマスの釣果。この日はバラシが少なく3匹のみ。釣れた部類になるのかどうかは人それぞれの感じ方だと思うけど、僕個人としては、まずまず満足すべき釣果であった。釣果もそれなりで活性が高かったのも、明日もう一度竿を出してみたいと考え、宿の確保をする。携帯のインターネット接続を利用し、近くのホテルを探し釣り場から予約を入れる。殺風景な原野の中で、文明の利器を使うというのはアンバランスな感があるのだが、見た目は自然の中であっ

ても、その影には人間が隠れているのだ。

翌日、早朝にホテルを出発して林道を下っていく。ゲート近くで昨日対岸で好調だったフライマンと談話をする。お互い、ルアーとフライ。違う釣りをしているのだが、狙いは同じ。また、このフィールドを共有しあったという接点があったのか、極めて友好的そして紳士的な楽しい会話だった。世の中には餌釣りをはじめとして、テンカラやルアー、そしてフライと渓流域では様々な釣り方を楽しむ人がある。しかし、残念な事に、他人の釣り方を否定的な見方をする釣り人がいるのは悲しいことだ。

それぞれ違った魅力と、奥の深さがあるのが釣りの世界。疑似餌釣り師が餌釣りを軽蔑的な目でみることも多いけど、渓流域の餌釣りは他の釣りに劣らぬ奥の深さがあるのも事実だ。キープを目的とした数釣りを奨励するつもりは全くないけれど、イトフケと呼ばれる微妙なアタリを完璧なまでに取れる名人。流れを三次元に読み、郡上で言う”食い波”に餌を確実に送り込む名人がいる。

どの釣りでもマナーが悪い釣り人が居るし、結局はその人のモラルというのだろうか、人間性の問題なんだろうな。釣り方の問題ではなく、釣りに対する姿勢と考え方の違いが全てなのかもしれない。気分良く釣り場へ到着すると、対岸で二人の釣り人が釣りをするわけではなく、岸に腰掛け休息をしていた。僕は、さっそくキャストを繰り返す。ところがアタリが全く無い、それどころか魚の追いやライズも全くない状態でころうじてハスで底をたたき一匹のアメマス釣ったものの後が続かない。昨日の昼間とは違って河口は満水だ。丁度、明け方近くが満潮の様で、下げ潮に入って喰いは良い時間と思われるのだが、ルアーには全く反応がない。

丁度、そのころゲート近くで談話していたフライマンと、その友人方が釣り場へ近づいてきた。「どうですか？」の質問に「全然駄目です。まだ一匹だけです」と寂しく答える。「え、そうなんですか・・・」と少し驚いた様な顔をしていた彼らだが、対岸で竿を振りだした瞬間から正に入れ食い。下手すると4名全員の竿が弓なりになっている。こちらは、ルアーやアクションを換え、懸命に魚を誘っているのだけれど、相変わらず魚は喰ってくれない。結局、低水温時期のこの季節はアメマスの活性もそれほど高くないようだ。それ以前に食性が小魚よりも小型のエビや泥に生息しているゴカイなどを食べているのかもしれない。

渋い状況の中、黙々と竿を振るのは精神的に疲れを感じ、しばし岸に腰を降ろし煙草を飲む。冷たく透き通った空気に、煙草の煙と白い息が混じり風下へ流れていく。気を取り直して竿を振り、疲れると休憩の繰り返しだ。それでも11時を過ぎた頃、水位が下がりきり、急にルアーに反応する様になってきた。対岸のルアー師が連続ヒットしている。一昨年のアタリルアーである鯖色のシャロータイプミノーをキャストするとドンという手応えが出た。手早く取り込み、直ぐにキャストすると連続ヒットだ。それでも数回キャストを繰り返すと、全く反応が無くなってしまう。ルアーを見切るのは本当に早いようだ。

ローテーションを繰り返すが、段々と投げるルアーが無くなってきた。ベストのポケットからフローティングのラパラの入ったケースを取り出し、ラパラ・ジョイントをセットする。実をいうと、このミノーで魚が釣れた試しがない。でも、この特有の動きが効いて、一発目で良型のアメマスがヒット。二投目もリトリブ直後に喰ってきたのだが、これはまさかとの思いがありアワセそこねてしまう。また反応が無くなり、次はラパラ・フローティング9cm。これも意に反して二回目のキャストでヒットする。三投目も喰ってくる予感がして注意深く泳ぐ姿をみていると、底からアメマスが浮かんできて大きなラパラを引ったく様にくわえ込む。このシーンは実にエキサイティングで釣っていて思わず声が出てしまう程だ。

結局、昼前後の一時間半で9匹のヒット。残念ながら帰らなくてはいけない時間になってしまった。昨日の状況を考えると、これからの時間がルアーで勝負出来るタイミングだったのかもしれない。大きさは初日の46cmが最高で全てこの場所のアベレージ。二日間に渡った釣行だったけど、苦労したにも関わらず、今シーズンの序盤戦としては上々と思う。次に訪れる時、どんな釣りが出来るのだろうか。原野と登り道を歩きながら、次の釣りを考えていた。

開幕の溪

ここ数年の純然たる溪流釣りの開幕は、日高のとある溪から始まる。4月上旬まで林道は深い雪で覆われ、訪れることが出来るのは五月を間近に控える4月下旬の頃だ。冬の間、林道を覆っていた雪も消え、日陰の斜面に僅かに残雪が見える。木々はようやく芽を膨らませ、溪にも春が訪れていた。真新しい轍の残る林道を愛車で上流へ向かう。今回は釣友N氏も同行しており、久しぶりの溪流釣りを楽しむ予定だが、先行者がいるとなると厳しい釣りになるかもしれない。

川筋と平行に林道は走っているものの、下流域では山麓中程に道がつけられており、盛期では木々の影になり溪を望むことは出来ない。しかし、葉の落ちた今時期は、眼下に目的の溪が見え、否応にも期待感が高まっていく。やがて、林道は川の真横となり、水量や濁り具合が手にとって判るようになる。既にかなり上流域である為、雪代の影響は少ない。僅かに濁りが入っているように見える流れは、水量も豊富で清らかな瀬音を奏でていた。

この上流で流れが三つに分かれている。このあたりが、この川の最上流域。地図上では、まだまだ上流へ向かっているが、小型のイワナが多くなる。そして、この合流点周辺は、林道が唯一川筋を横切っている場所になる。この場所の直下はこの川で最大の淵になっており、これまでも多くの岩魚が姿を見せてくれた場所だ。今回、山女魚は禁漁期という事もあり、岩魚域の最上流を狙う事にしたのだが、この岩魚の最大のポイントもこの淵なのだ。試釣をしてみるのも楽な場所で、竿さえ持てば足回りは普段靴で良いというものもありがたいものだ。

淵を挟んで、左岸右岸に分かれて釣りを始める。釣り方は二人ともルアーだ。特に今回は岩魚狙いの釣り。本州とは違い、北海道の岩魚は人擦れしておらず餌で狙うには簡単すぎるし、必要以上に釣れる必要もない。(もっともルアー釣りにはまってしまったというのが本当のところ、餌竿は今では埃をかぶっている始末。しかし、盛夏の幅広山女魚狙いの時は餌釣りを楽しむ予定だが..) 手始めはA B Uの名品ドロップペン。淵を狙う為、重量がありブレードの軽いスピナーをセレクトした。

下流へキャストして数投目、決して沈んでいるとは言えないルアーを水面近くまで岩魚が浮かんできて、ゆっくりと追いかけているのが見える。そのままの速度で引いていると、首を振るようにルアーに食いついてくる。溪流の岩魚の為、大アワセは要らない。ロッドを軽く持ち上げるだけでフッキングして心地よい感触がロッドを通して手に伝わってくる。

居付の岩魚とは少し違い、斑点は大きめの蝦夷岩魚。小さい.. 20cmくらいだろうか。一匹釣れれば、この溪を訪れた目的の半分以上は果たしたことになる。遊び心が頭の中を横切りルアーをドロップペンからラパラのカウントダウン3cmに取り替える。流石にこの大きさの岩魚は、アメマスのように着水して即食いつくという事はない。それでも、トゥイッチングを入れながら、ゆっくりとリトリブしてくると、先に釣れた岩魚よりも小さなものがコンコンとアタックしてくる。そんな事を何度か繰り返しているうちに、一匹がフッキング。引き寄せる手前でフックが外れてしまったが、不思議と悔しいとは感じない。むしろ、岩魚と遊んでいるという満足感を覚えた程だ。

対岸のN氏は、得意のハスルアー。久しぶりの溪流に最初はとまどっていた様子だが、勘を取り戻してきたようだ。クルクルとトリッキーな動きをするハスルアーの後を、岩魚が追いかけているのが見える。こういう状況では、釣っている本人よりも魚が見えるものだ。数投目、N氏も岩魚を釣り上げ、笑顔でリリースしていた。

その後、魚の姿も見えなくなり淵を後にする。林道を更に進み枝川へ向かう林道の分岐を曲がり、小さな橋の手前に駐車し川の様子をうかがう。この橋の直下もちょっとした深みになっており降雨後の増水時などに良型の個体が入ることが多い場所だ。また下流側には大きな倒木があり、この深みを狙うには橋の上から竿を出すしか方法はない。かつて餌竿を絞り込み、やや強引とも言える抜きを試みた時、パーマークの明確

な尺を越える魚体が、ラインブレイクと共に水中に消えていった思い出の場所でもある。N氏と2投毎の交代という決めで竿を出すのが、反応はない。シーズン中のワンチャンスの場所なので、粘っても意味がない。この橋から下流の合流点まで下り釣りをすることにし、ウェーダーに履き替え、橋の脇を川に向かって降りていく。入渓直後の深みで第一投。ブルンとした手応えを感じ今日の二匹目。合流点までは釣りをしなければ、5分ほどの距離でしかない。その後、深みを中心に交代で竿を出すのが、残念ながら魚の姿は見え、車に戻る。途中で山肌から小さな沢水が溪に注いでいるのが見え、石についた苔が心を和ませてくれるのが有り難い。帰路の途中、例年決まって魚が顔を出すポイントに寄り、一投目のラパラでばらしてしまった。その直後にN氏がハスルアーで同じ岩魚と思われる良型を釣り上げた。

この後、もう一カ所の秘中のポイントを狙う予定だったが、流れの筋が変わった為か場所が判らず川を後にした。かつては大型の尺山女魚が群れていたと言われる溪だが御多分に漏れず、ここ数年来は釣り人の入渓も多く、山女魚の姿が消え、岩魚も型はどんどん小さく、魚影も少なくなってきた。

しかし、その清冽な流れは健在であり、溪の周りには木々が生い茂る一級環境を持っている。やがて「釣れない」との噂が広がり釣り人が遠ざけ、多数の溪魚が群れている溪に戻ってくれる事を願う。かつては8～9寸の山女魚が竿先を絞り込み、ここぞと思うポイントでは必ず良型の山女魚が顔を出してくれた。今では、その想い空しく釣り人の願いは川に流れていくのが殆どか。それでも、この川を訪れる度に、魚と遊んだ楽しい思い出が次々と思い出され、懐かしさに似た安堵感を感じる。その場所を訪れ、楽しかった日々を思い出す事もまた楽しいものだ。この思い出が多いこの川こそ僕のホームリバーであり、シーズンの開幕を迎える川であるのだ。

遡上アメマス

林道を歩いていると、水たまりに薄氷が張っていた。予報では最低気温は4度程度の筈なのだが町を離れると、やはり寒い。早春以来使っていないネオプレーン製のウェダーを躊躇わずに選んだのは正解だろう。やがて林道が原野にとけ込んでいく様に消えていくと、後は谷地坊主と笹に覆われた原野をひたすら歩く。笹のある場所はかつては林だったと思われるが、長い年月を経て、違和感無くとけ込んでいる様だ。

河口の水面が見える頃、ようやく太陽が東の空から昇り、晴れの空に上る太陽が周辺を朝焼けに染めている。旅であれば、その光景を眺め何かを感じる事も出来るのだが数日前に惨敗した僕には釣り場の水面しか目に入らない。

先日の遠征でタイムアウト寸前に反応の良かったミノーをスナップへ取り付け、今日のファーストキャスト。対岸手前に着水し、ゆっくりとリールを巻いていく。ロッドを操作しルアーに動きを与えると、何やらルアーにまとわりついている違和感を感じる。しかし、喰うまでの反応はないようだ。一投で何が判るのか？と言われそうだが、僕は一投目で喰ってこない場合は原則として効かないと判断する。せっかちと思われそうだが、釣りをしていて魚の居る場合は大抵は最初から喰ってくるものだ。ルアーは色々な種類があるけれど、それを使う一番のチャンスは、それを選んだファーストキャストだと思っている。魚がいるのは間違いない場所なのだ。しかも、朝マズメで水が動いている時間である。一投目で、喰わないわけがない。

つい数日前に、この場のアメマスが一番、反応したコツミたいなものも掴んでいる。その一投目は文字通り、パイロットルアーなのだ。遊ばれているだけでは済まないと僕は思ってしまう。

ボックスを開け、昨日ショップで購入したミノーへ交換する。反応が薄い時はサイズを落とし、その反応の変化を見るというわけだ。軽いミノーの為、フルキャストしても対岸へは届かない。向かい風であれば、使えない軽さなのだが、幸いにも朝は無風であった。細いラインのお陰で、釣りになる飛距離が出るのが有り難い。アクションを加えながら、リールを巻いていく。ミノーが川の中央に差し掛かった頃、ゲン！というアタリ。そのまま寄せていくと、静寂を破り水面の炸裂する音が辺りを鳴り響く。

ウィンターランと呼ばれる今時期のアメマスは、白銀色の鱗と豊潤な海で育った砲弾の様な体型をしている。そのファイトは強烈でたかがアメマスと考えていると、それが甘い考えである事を思い知らされるかもしれない。実際、今回の釣行でもスプリットリングが二回伸ばされ、フックが無くなってしまった。

朝日を浴びて光り輝くアメマスを撮影し、水へ戻すと水底へ一目散で逃げていく。その直後のキャストでは、着水して即ヒット。結局、このミノーで連続5匹。ルアー釣りではなかなか味わう事の出来ない連続ヒットは、久しぶりだ。早春の開幕で一度味わったのが最後だから、半年ぶりの事だ。流石に、6匹目はそう簡単にはヒットしてくれない。目の前を何度となく通り、頭上でバチャバ



チャを派手な音を立てていれば、流石にスレてしまうという事だろう。

ポイントを休ませる為、移動しながら海へ向かって歩いていく。途中の反応も良好で河口の浅瀬を渡り、

最初のポイント対岸へ到着したとき、既にツ抜けとなっていた。その頃になると陽はかなり昇り、朝焼けは薄れ、ピーカンの様相をなしてきた。これまで使用していたミノーは、元々溪流向けに開発された物でこのような状況になると流石に辛い。なんといっても、水面下10cm位を泳いでいるのだから・・・シンキングであれば多少は沈められるけど、この釣り場ではシンキングタイプはあまり成績が良くないのだ。釣り場は平均的に浅い場所が多く、その水底にある塵や水草に絡まってしまう事も多い。

ただ引きであれば、それは何とかあるのだから使いづらいのは間違いない。シンキング以外である程度の深さに潜らせるとなると、ディープダイバーの出番ではある。しかし、潜りすぎではシンキングと同じだ。こうなってくると選択肢が非常に限られてしまう。また、出来ることであれば、ボディのサイズも落としたい。朝は好調だったとはいえ、基本的にスレてきている釣り場だ。大きなルアーよりも小さな方が反応は良い筈だし、また、更なるスレも少ないと思うからだ。

何個ある候補のディープダイバーミノーの中から一つを選択してキャスト。最初は何もアクションを加えず、単純に引いてみて深度を見てみると、丁度良さそうだ。そんな事を思っていると、いきなりヒット。水の中で針から逃れようと左右に走り回っているアメマスの姿が見える。あまり暴れさせるわけにもいかなないので強引に寄せてくると、岸近くに生えている水草をルアーに絡ませながら上がってくる。朝のように連続ヒットというわけにはいかないものの、キャスト方向を変え、また岸から見える急な駆け上がりをトレースするようにすると岸際でドン！とアタリが出る。

数日前の不調が嘘だったように、次々とヒットするアメマスも3匹くらい釣れるとルアーを見切ってしまう様だ。それでも、活性は高く、数個あるディープダイバーを交互に変えていくと、その直後にドン！とアタリが出る。



やがて何をしても無反応となり、今日はこれまでかと覚悟した時、水面の動きが止まっていた。丁度、上げ潮が川の流れとぶつかり、平衡状態となったようだ。やはり水が動いていないと魚も動かない様だ。暫く、釣れない状態が続き、やがて下流から上流へ流れが変わった頃、久しぶりのアタリがあった。それからというもの、また朝の様なアタリが出始め、水面は沢山のライズやモジリが見え、連続ヒットも当たり前という状況となる。

朝と同じように数個のルアーを変えながら、次々とアメマスを釣っては放しを繰り返す。やがて満潮が近くなりアタリが遠のいてきたのが頃、既に40匹の釣果を数えていた。日中は予想していた事だが、やはり釣れない。事前に調べた潮汐予報では、長潮という潮まわりのようだ。干潮から満潮となり、だらだらと高い潮位が続く様で下げてくるのは、夕方近くになる予想となっていた。実際、昼から3時までは単発もいところで、忘れた頃に釣れ、また暫くは反応がないという状況となる。もっとも、今日は午前中の釣果だけで十分満足といえる数を上げている為、ゆっくりと昼食を食べ、河原に寝そべり昼寝をする余裕もある。

空を見ると相変わらず晴れの良い天気、昼寝をするには丁度良い。もっとも、釣れない日は晴天を恨めしく思う自分であるから、勝手な話ではあるのだが。道東の3時ともなると、既に日は地平線に限りなく近づき、自分の影が水面に伸びていた。岸から離れた場所に釣り座を構えても足場が高いため、どうしても影

が水面にかかってしまう。

移動しながら探してみるものの、これといった反応もなく、引き上げ時かなと考えていた頃、河口から無数のモジリが徐々に上流へ移動している光景が目に入った。そのモジリの中にルアーをキャストすると、反応があるものの、何故かフッキングをしてくれない。色々、アクションを加え誘ってみるものの、やはり反応は変わらない。小細工をやめ、アクション無しで早く引いたとたんドン！と来た。止水に近い河口域。ルアーを長く見せては、興味の対象でしかないということなのかもしれない。

この一匹でコツを掴み、同じように引いていると次々とルアーへアタックしてくる。やがて、陽が西に沈む頃、ようやく狂乱的なアタリも薄れ、竿をたたんだ。釣れたアメマスは62匹となった。数が全てではないが記憶に残る釣行となった一日なのは間違いないだろう。

晩秋の最良の一日となる釣りに、疲れを忘れて帰路についた。



道東の秋

林道の轍は、深い水溜まりになっていた。河口上流で流れ込む小さな支流は、少しの濁りが入り水かさも増している様だ。明け方までは曇りと予報されていたけど、状況を見る限りは夜半過ぎから断続的に降雨があったようだ。林道は泥の道と化し、水溜まりは底なし沼に思える。雨は相変わらず断続的に降り、夕方までは降り続けるみたいだ。気温も低く、恐らく一桁だろう。

雨に濡れた手が、痛さを伴ってきた。林道は、二つくらいの丘を越えると牧草地帯となる。その眼下には原野が広がり、その奥は太平洋が見える。海に近づくと、長年風雨にさらされ朽ちてしまった廃屋が佇んでいた。いつまで人が住んでいたのだろうか。理由はわからないが、離農という厳しい選択をした先人の過去を垣間見た様な気持ちになる。



足をそのまま海岸へ向け、砂浜に出るとそんな気持ちは風に流され、遡上しているであろうアメマスに心は移っていた。釣り場の水位は高く、丁度満潮の様だ。海から水が流れ込んでいる様子が判るが、魚の姿は見えない。

例年、アメマスの溜まる場所は一定している為、適度にキャストを繰り返しながら一番近い本命ポイントへ向かう。突風が水面を波立たせて荒れ模様となってきた。その荒れた水面に時折、ゆっくりとしたモジリが

見えたのを僕は見逃さなかった。浅く、藻が茂っているポイントの為、ミノーは少し厳しい。7gのスプーンを対岸へキャストし、デッドスローでリトリブすると、ティップがキュン！と絞り込まれるようなアタリ。すかさずアワセを入れるが乗らない。数度キャストしても、状況は変わらずである。

遡上直後のアメマスは、確かに遊泳力に優れてはいる。しかし、今日のスプーンへのアタックは、極端なショートバイトである。キャストをし過ぎてかなりスレてきた為、一番の深場へ向かった。ここに来てスプーンからミノーへ、ルアーを変更する。水位が高い為、小型のシャローミノーでは反応はない。小型のディープダイバーを結び、ゆっくりとリトリブしていると突然、右手から抵抗感が消えた。食い上げか？すかさずアワセると音を立ててラインが一気に出ていく。良型の様で潜水艦の様に水底を走り回り浮いてこない。スピード感ある走りはカラフトマスかもしれない。そう感じていた頃、ようやく水面に姿を現した魚は体高あるアメマスだった。婚姻色が少し出ている雌。

メジャーで計測すると、僅かに60cmに足りないが堂々とした立派なアメマスだ。気を良くして、キャストを繰り返すが何故か反応がない。中型のディープダイバーではボトムに届いてしまう状況の中、セレクトしたのは中型のフローティングミノーだ。色は派手なクラウン・・シャルトリュースとレッドとパールホワイトの組み合わせ。如何にもド派手なカラーなのだが、今日に限っては抜群に効いたカラーであった。

試しに同じミノーの色違いを使うと、反応が激減する。水底のボサ場に溜まっているようで、エリアに入れば複数のアメマスが後ろを追ってくる。お祭り騒ぎがようやく収まったのは、潮が引いてきた9時少し前の事だ。



水位が下がると当然、ミノーのレンジも変わる。ボトムに当たるようになればミノーの宴は終了だ。元々、水深は浅い釣り場だ。潮が引いた時間は、自ずと小型スプーンの出番となる。スプーンに関しては、この釣り場では定番ルアーが存在する。もっとも、人によりダメだという声も聞いているから、あくまでも僕にとってはという意味である。予想通り、このスプーンの反応はすこぶる良い。但し、ショートバイトなのは早朝の時と全く同じだ。デットスロー、もしくはストップ時のフォーリン

グしか使えない小型スプーンの宿命かもしれない。

それでも、数を釣れば違和感でのアワセが決まるようになる。水面でピチャ！とライズしている場所へキャストすると、着水同時に喰ってくる事も多いようだ。例年と違うのは、ライズを取れるという事以外に掛かるアメマスのサイズが大きい事だ。約一ヶ月後くらいから、本格的なシーズンイン。しかし、その頃は数はコンスタントに出るものの、アベレージは 35cm ～とかなり小さくなってしまう。今回は、45cm を少し切るかというサイズがアベレージであった。アメマスとはいえ、河口域での遡上物はかなりの引きを見せる。信じられないかもしれないが、掛かったアメマスの何割かはイルカの様にジャンプするほどだ。こうしたファイトの代償が手の握力激減、腕は疲労痛である。時計を見ると、干潮を迎える時間になりつつある。潮が止まれば、喰いも止まる。風雨の続く中、既に明日の釣りを心に浮かべながら釣り場を後にした。



※この釣行記は 2005 年 9 月 23 日に Weblog へ掲載したものを、転記したものです。